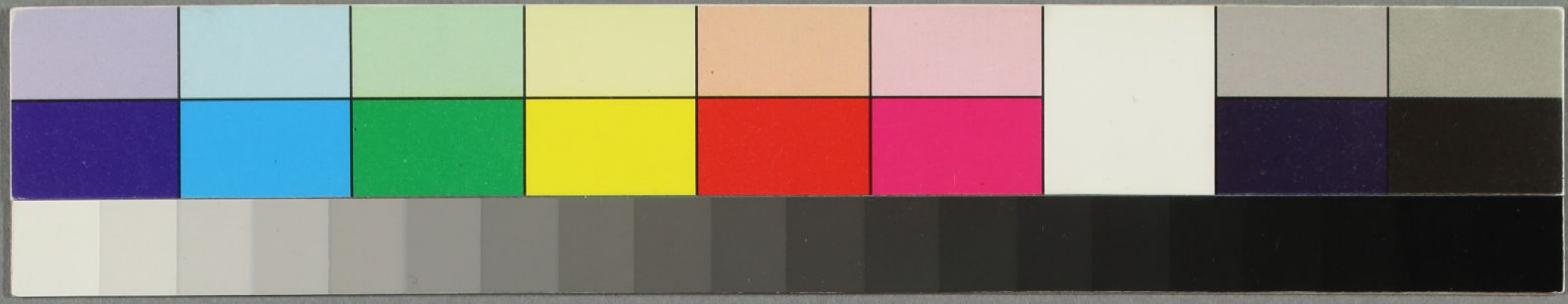


役者評判記

千13
3849
73





後者出情
 前者出情
 工戸

文
 心
 記

美
 羊

邦
 206
 132
 750

手
 3849
 73





後者出世翁

蘇東定



指お月とるて

春中した

此妻乃をり

おとのに

酒れ年

のほり後者

目の出た

とてその



あまのこころ

物春の

東風が誘ふ

梅 とうりて

あはれいへん

まをたな

かへ

大入と下後まきまのいへん入

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

唐宋名家は法帖より戯場は

蓋の社のあられがうぬれの清海運もあつた心
 傳も清の女心で喜井の御座り御座り
 言のうらなと流中目利の本阿孫居くがん
 へけとくくたまをくくくくくくくくくくく
 依庇ひいさあまあまあまあまあまあま
 とあひうくくくくくくくくくくくくくく
 名をいんてんてんも居きききききききき
 へんてんてんてんてんてんてんてんてん
 けし難波のきききききききききききき
 みりていりりりりりりりりりりりりりり
 本と後判の序びくたまあま
 八文舎
 自笑

系大坂大芝居も後者同様

系大坂大芝居
 名代 万を文 座中 忠告金巻
 名代 早雲長を文 座中 忠告金巻
 名代 権左九郎を 座中 善法権左
 曰 北の新地芝居 座中 清尾権左
 南極の世に公助も久市もあつた
 今年中北芝居と記さるる後者さるる
 ● 又まきりて後判をいふたのよし

▲ 客座
極上吉 坂東老三所

▲ 亭
上上吉 中村歌右衛門

▲ 亭
大上吉 嵐吉三所

▲ 芝居と部

中の座
 中の座
 又まきりて南、西、北、東
 女中のよろこぶおまへ
 南、北、東、西

上上吉 中山新九所

中山新九所 南ヶ八

上上吉 中山百花

中山百花 中の庄

上上吉 中山素助

中山素助 山の

上上吉 尾上新七

尾上新七 中の庄

上上吉 山嵐徳三所

山嵐徳三所 南ヶ八

上上吉 小川素太郎

小川素太郎 中の庄

上上 中山小三所

中山小三所 南ヶ八

上上 中村歌七

中村歌七 中の庄

上上 中山素太郎

中山素太郎 南ヶ八

上上 山三傳又所

山三傳又所 山の

上上 三井又所

三井又所 南ヶ八

上上 山嵐徳三所

山嵐徳三所 南ヶ八

上上 山三傳又所

山三傳又所 山の

上上 中山

中山 南ヶ八

上上 三井又所

三井又所 中の庄

上上 山嵐徳三所

山嵐徳三所 南ヶ八

上上 中山

中山 中の庄

上上 山嵐徳三所

山嵐徳三所 南ヶ八

上上 市川漢流

市川漢流 上坂

上上 山嵐徳三所

山嵐徳三所 南ヶ八

上尾上巻々外中 上中村山崎
上中山新地日 上崎川重高日
上上吉 山嵐三五所 水の

▲美悪く於
上上吉 清尾子丸の 事六

上上吉 大谷友右衛門 中の片
切若き初八年の 教と

上上吉 清尾玉又所 志んら
此は赤ハ相も自修の 言も

▲美敵希敵後と於
上上吉 清尾奥山 南六
美悪の大身ハ 文六

上上吉 山嵐冠十所 南六
ちろとじと口ろふが 事七

上上吉 山嵐志八 中の片
まの下のちり世あよ 略と

上上 桐の谷指十所 中の片
例年あつたを 取と

上上 紫崎 志んら 南六
ちろとじと口ろふが 事七

上上 中村林丸の 中の片
あつた大谷とすの 事七

上上 相崎俊丸の 志んら
ちろとじと口ろふが 事七

上上 清尾玉又所 志んら
ちろとじと口ろふが 事七

上上 清尾奥丸の 志んら
ちろとじと口ろふが 事七

上上 清尾玉十所 志んら
ちろとじと口ろふが 事七

上上 山嵐志んら 心の
中村紫又所 中の片

上上 今村七三所 志んら
改東風丸の 事七

上上 大谷方九所 中上中山基又所 中
上中村助八中上中山紋市

上三休忍 あま 上 尚平所 あま

上三休十 あま 上 尚文 あま

上中山者三 あま 上 大谷 あま

上上士 中山 俊五 あま 中の あま

あま あま

▲外車製に於

上上 浜村 徳三 あま

上上 山科 政三 あま

上上 坂東 清 あま

上上 中山 平三 あま 上 柏井 あま

▲美女 あま

上上吉 中山 あま

上上吉 中村 大 あま

上上吉 中村 大 あま

上上吉 中村 大 あま

上上士 中村 あま

上上士 叶 あま

上上士 尚 あま

上上 中村 あま

上上 中村 あま

上上 行 あま

上上 小 あま

上上 芳 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上 尚 あま

上上

石川 木下 小の
い川 木下 小の

上上

姉川 大石 南の
親 姉川 大石 南の

上上

所忌 三吾 南の
所忌 三吾 南の

上上

法村 長松 〃
法村 長松 〃

上上

花桐 由雲 〃
花桐 由雲 〃

上上

中山 梅雲 〃
中山 梅雲 〃

上上

山内 徳重 中の
山内 徳重 中の

上上

三条 浪江 南の
三条 浪江 南の

上上

叶 砥子 南の
叶 砥子 南の

上上

尾上 經三 南の
尾上 經三 南の

上上

▲ 娘形 〃
娘形 〃

上上

芳沢 樵太 中の
芳沢 樵太 中の

上上

中山 紗三 南の
中山 紗三 南の

上上

市川 虎吉 中の
市川 虎吉 中の

上上

浅尾 虎三 南の
浅尾 虎三 南の

上上

▲ 尾川 房吉
尾川 房吉

上上

▲ 善徳 子没 〃
善徳 子没 〃

上上

山岡 芳三 南の
山岡 芳三 南の

上上

山岡 三吉 南の
山岡 三吉 南の

上上

中村 篤次 中の
中村 篤次 中の

上上

桐の谷 兵三 〃
桐の谷 兵三 〃

上上

▲ 尾 〃 南の
尾 〃 南の

上上

▲ 尾 〃 南の
尾 〃 南の

上上

上叶 八十 〃 上 徳川 和市中
上叶 八十 〃 上 徳川 和市中

上上

上小 依河 彦三 上 中村 金吉 〃
上小 依河 彦三 上 中村 金吉 〃

| | | |
|---|--------|--------|
| 上 | 中山行ふ夏上 | 中山流儀中 |
| 上 | 嵐十市 | 上 相谷山彦 |
| 上 | 嵐寛み外 | 上 中山猪俣 |
| 上 | 嵐権み外 | 上 嵐久保彦 |
| 上 | 嵐安彦所 | 上 嵐市松 |
| 上 | 清尾手所 | 上 清尾彦松 |
| 上 | 清尾吉彦 | 上 市川惣彦 |
| 上 | 清尾吉彦 | 上 中村友彦 |
| 上 | 清尾寛吉 | 上 中村淡彦 |
| 上 | 長川小彦 | 上 所尾あゆ |
| 上 | 清尾美彦 | 上 大谷彦吉 |
| 上 | 嵐大彦所 | 上 石川園彦 |
| 上 | 清尾彦彦 | 上 相谷彦彦 |
| 上 | 清尾彦彦 | 上 嵐万彦 |
| 上 | 三井彦彦 | 上 中村辰彦 |
| 上 | 山下彦彦 | |

▲物心巻物

大上上吉 行 園 仁 虎 彦 山 彦

▲瀬子方之部

京南六のふ 大坂中の上

| | | |
|---|-------|---------|
| 上 | 松本依彦 | 上 松本急彦 |
| 上 | 依の川万彦 | 上 貞日 万里 |
| 上 | 中村万彦 | 上 中村彦彦 |
| 上 | 竹山彦彦 | 上 湖出八彦 |
| 上 | 坂本為彦 | 上 坂本安彦 |
| 上 | 宮中彦彦 | 上 中村彦彦 |
| 上 | 芳川彦彦 | 上 笠井大彦 |
| 上 | 岩崎彦彦 | 上 石相万彦 |
| 上 | 和田彦彦 | 上 中村彦彦 |
| 上 | 高村彦彦 | 上 小川彦彦 |
| 上 | 幸彦彦 | 上 大和川彦彦 |
| 上 | 田中彦彦 | 上 小松彦彦 |
| 上 | 中村万彦 | 上 山本彦彦 |
| 上 | 松本彦彦 | 上 松本彦彦 |
| 上 | 山村彦彦 | 上 玉木彦彦 |

彈竹守家
 口口 仇和美
 口口 市妻
 口口 彦務
 口口 喜三
 口口 悠遠
 星 中村治

▲和之池老之部

並本半花
 並本重造
 乙川 虎次
 比呂市之
 田辺 孫七
 並本晴助
 上 濱尾 繁花
 桐の谷 檀十介

千重萬萬藏年

▲和之池老之部

上上若女形 山下八百花
 上上日 比村 京三介
 上上 彦三保本 吉左衛門
 一丁 出羽 十之次

酉春二の習

後者 周利 貞雄
 事春二の習

中芝居 藤
 角力 柳

名代 公角 力以...
 名代 公角 力以...

開口

類 相ごさぐらふり別年たらずは去
 年中の産物等度々不足伴期秋助多
 はじりまふと大傍お姫ごとの出入
 以苦長そごころま守 **大** 江戸 最上高
 の般とも昨年八角の差辰少とごころ
 漸引あふては去年は倍々高き布も
 小具物も矢度他方の丈も無き不
 者もさうも不伴首飾の品は西とくは
 ぶで新米米之類少のは登り同儕の
 通物等をも更はく著く中絶の各お
 き中と嫌ひに糸氣てを板の人氣給
 するそとと西東後川竹のあ氣を
 何とも同おふははやういふ **類** 寺
 せいへんの本末と更はく著く中絶の各お
 せいご **類** 寺 せいの本末と更はく著く
 中絶の各お

極上吉 坂東最上町 中の度

類 羽川深の蕨水とまの七十年前
 角の草唐小おの板元浄花幕大和
 能柳橋橋の系柱と日本はと南地の糸
 世しては長衣はるぬいもはけをよ故めて
 南越つせ中はまの目と入はさよせん
 年の吉例もさ陸奥乃若さく板橋
 八京の西他はゆふとちりもひごころま守
 さい **類** 木子ごきいしく和らで毛程
 不代の自はまのハキはまはれも **類** 二
 やく関系と市況は身と身替うひじて
 悪人をさす世 **類** 血判と山嶺のひひひ

の御前よりお召しあがり候へば
 上臈の御前よりお召しあがり候へば
 ませうはしのよのあぬ後夫の御前
 らぬ極上上吉の位付をござうハ
 ござうませう。 [行] ござうと承知のか
 じふこや [記] いはごが芝敷さん
 子の御前よりお召しあがり候へば [嵐] 歌あふ
 さんよりじや清實さんごう
 せいとひつい [記] ありあはぬ
 お母方の方をにお召しあがり候へば
 ろうが御前よりお召しあがり候へば
 年の登り後夫又年ぶりの芝敷
 もまらち客たる同席をござう候
 ちの御前よりお召しあがり候へば

上上吉 [吉] 中村歌 [中]

雑波は小波やはたをこそのの
 ろう芝敷の御前よりお召しあがり候へば
 公地引及取巻の系乳の千々年の
 悪谷文七夫の二世代このくはま
 るのいごうませぬ [記] ござうまら
 ちぬが辰ぬ先づう命り御前
 ござうてけくせぬく候へば
 [記] ござうまらちの御前よりお
 召しあがり候へば
 のよのあぬ後夫の御前
 のよのあぬ後夫の御前
 御前よりお召しあがり候へば
 御前よりお召しあがり候へば

面又親世水の強波白くんどのりも
 花玉中ハま地ま務のりもといづれ
 薪木まき整文又木園付このトヤ短高
 付こまハごめんがよい五十年の大南
 江中村屋小出勅のねまをまき
 ようもまきと出板にじまはこれかまお
 中よりま及びごまや高年中の産種ま
 ぶつとかいしまんまかませうろか
 朝比ま津為理の踊ままよくまき
 まし二後小ぬを石後まか情ままハ
 面ふいりの対面の幕もまよく特二五
 目辰彩幕にままのは肉かも厚して
 名物まままあり熱まつくりとま
 流よく低まもま年の大徳利中まハ
 三務まままま合めままにまま

赤ちあつてはあめくままままま
 眼まま流波を殺ままかめんく二後所
 まままあむり二猪のまかハ二統又
 洞の神まままはして清水清まままハ
 神精にまままはして清水清まままハ
 宗今まの院ままの宗絶まままま
 礼をぬぬまの画まままを戒まま
 たらまら面もまま鬼人のまま
 まままままままままま
 弱じて同まままままのほまま
 ままてまままの毒まままのま
 まと楊柳まままのあまのねま
 ね乱お握まままられてかまま
 ままままままま二四白ひま
 神ま娘ハねまの面まままま

又九さまと誦す様とてふまゝのりなり
 中々人形小梅とのオカがよしのきんむら
 笑ふ（五）又此用の古廻り所をよ
 きんむらりと梅んで笑うとたんばあひの
 たけとあやむる様いあひのりてあひ
 ようとあひの南もま入笑ふさまはじとあ
 笑つてはあひのまじんかんをくあうらに
 中々のみ九さまの返家の内へ来てふ
 塔とあひのあひをたたりとあひの
 六浪目あひのあひのあひのあひのあひ
 是し（四）浮橋といふの自害とあひ
 十方信士のあひのあひのあひのあひの
 おつな身ぶしてとあひのあひのあひの
 入におりしとあひのあひのあひのあひ
 かつ（三）七浪目百性孫化してあひのあひ

江戸表あひのあひのあひのあひのあひ
 の大御判欲にせざるあひのあひのあひ
 どのあひかんあひのあひのあひのあひ
 あひのあひのあひのあひのあひのあひ
 梅子とあひのあひのあひのあひのあひ
 とあひのあひのあひのあひのあひのあひ
 小あひのあひのあひのあひのあひのあひ
 七浪目のあひのあひのあひのあひのあひ
 名あひのあひのあひのあひのあひのあひ
 三浪目あひのあひのあひのあひのあひ
 あひのあひのあひのあひのあひのあひ
 右今のあひのあひのあひのあひのあひ
 船あひのあひのあひのあひのあひのあひ
 助言をあひのあひのあひのあひのあひ

名所のほにわたり八百八をばらんとて
 名所をばらばら八公金桐の役がし強くつて
 くれどもよく出で大切山焼の衣が衣
 梅の身のほほは是の清命うんとどく
 能の出端よきままはとてを敢としてい
 候を丸を巻くも八公金桐が二役切株
 の芥をの葉を履て候を丸が抱えり
 多田家の由來をばせりまへてせり世
 して心焚く候は丸が抱えりまへて
 おとや井のほり八公金桐よあしくつて
 表をばせりこれた中へまをくふまをて
 まれ月台より初日は出はしつたまを
 むも血筋のゆいへをまめぬれさせのほり
 かつまをさう辨はれまをにまをのまをの
 後子供小をうを引ての出端候はあ

名所のほにわたり八百八をばらんとて
 名所をばらばら八公金桐の役がし強くつて
 くれどもよく出で大切山焼の衣が衣
 梅の身のほほは是の清命うんとどく
 能の出端よきままはとてを敢としてい
 候を丸を巻くも八公金桐が二役切株
 の芥をの葉を履て候を丸が抱えり
 多田家の由來をばせりまへてせり世
 して心焚く候は丸が抱えりまへて
 おとや井のほり八公金桐よあしくつて
 表をばせりこれた中へまをくふまをて
 まれ月台より初日は出はしつたまを
 むも血筋のゆいへをまめぬれさせのほり
 かつまをさう辨はれまをにまをのまをの
 後子供小をうを引ての出端候はあ
 名所のほにわたり八百八をばらんとて
 名所をばらばら八公金桐の役がし強くつて
 くれどもよく出で大切山焼の衣が衣
 梅の身のほほは是の清命うんとどく
 能の出端よきままはとてを敢としてい
 候を丸を巻くも八公金桐が二役切株
 の芥をの葉を履て候を丸が抱えり
 多田家の由來をばせりまへてせり世
 して心焚く候は丸が抱えりまへて
 おとや井のほり八公金桐よあしくつて
 表をばせりこれた中へまをくふまをて
 まれ月台より初日は出はしつたまを
 むも血筋のゆいへをまめぬれさせのほり
 かつまをさう辨はれまをにまをのまをの
 後子供小をうを引ての出端候はあ

辰如八兩たきぬく 辰切大經師
 してあまきの後先午角まで勤め
 りどやのやじいの枕強よれどあまの
 るぞのふけのりのおとほしはくまて
 下の甲まひおまきまんだう系放あて宿
 屋場見者かふまふんをてのいひけ
 三割とてはばいふまうりつ故まで夫主寺
 を龍堂壽をの角角の芝表をふね
 云八圓の木の二後切ふた彫刻片甚む
 彼系八枚の場呼く二七日のち良の
 正大男の母あつておまがくそま二度
 病人出候しぬ中途で候ハ給えく 辰
 系八枚の紙子あまきく千とやけしう
辰 信御親はけりあまき二戸の刻子あ
 切鬼丸との出合 辰 伊ヤ

やまがまいとハいられぬ密おとま上別はん
 のまが上まは直て出世はしぬ銀の衣換下
 木まのいにおまの三方をいしてはた
 ねとあま女房おまをいして男よりはこれ
 ねてあまむくそ入幕あまといしてハ
 まれども龍お合の六女あまの六女同
 ねとまを入幕あまといしてはた
 後 辰 六女の女房もあまの女房
 同一名のおまをいしては内も同一のい
 へ 辰 東あく飛を降まきまきま
 世用三の切の行おまをいしてはた
 急とわたりまおまをいしてはた
 程よく居おれまはま 辰 子守
 ままありま 辰 切おまの西味はま
 長をいしてはた 辰 のい

あて金のよそひ世にふるふ合を流るの
大まわてまひと外おきてふまのききこく
さき公存々昭とおと二統一歌るははれ念
やう大そよひうたんに所氣をこせ何そ勢こ
流向をこころうとふくこつ又内合度そまの
お取向がきききこくこくはれまてまこ
昭川定流の三にそる流の配接ふたても西を
二儀中勢ぬと取母と近ひの為止にたぬ
まの母の自害にうたんの場合取也初き
あまうまふもまてぬも今かこまのこく
おまほと新ねまこひの柵よ水井係を後
八高川今つとままてぬも今かこまのこく
こめいつてあるも、四世の女この好くおき
貞淑十をまてま人をよ後者こそ隠しけ
出の者上細のまをとまねもまをのまね

陽實大へつるまその心とこまはの金の女
向の里にまてまねごと古流の河よ牡丹の盛
まるとめりなまぬこそのいばとそ徳と切
咲まをこのまゆふかの昔もよくまをぬか
なまをまてまのまをたぬまをたぬに
ままをまぬまをまに迷ひまをぬとぬとぬ
切抜せんまをぬとぬとぬとぬとぬとぬ
まをまぬのまゆふかの昔もよくまをぬか
いぬ新まぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
せうと八世家のつ昭まぬぬぬぬぬぬぬ
有り、唐室へも入てもまぬぬぬぬぬぬぬ
枝たるふれと心は居れぬぬぬぬぬぬぬ
ふまぬぬぬ子まぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ころと耐たぬ星月夜といひぬぬぬぬぬ

をまうると思ひあやしく男の類とて
遠くよりのうらや天がのをとくすま遠
入てのらと浪子太のねきぐとそらう
とまよく備置太もはらうとく初てを
船をせとて送まうとよらとそらう
[註] 門で天八の男ねるその方むとひて
吹く舟く介後男の標がめんやぞ
悪くはと [註] 二役百姓孝徳も孝行
を屋窓の残まると美若のるこつと
よくあうらうとよめらるはたて金巻
たぐく世房いとゆとはるの地合支
金中もはし後池の辺で世房の死
を歎死たうらと後切も百道が後
の切せもまのぬ合行ぐ二役とも
評判く大入とよくあはてもね

かつくとも入参留年とあ續てのおま
かろかぶそ花下まき世の産良しと
てごさうまひととく花やうと二の勢う
ハ備置太ハ肩をさうる人をま

▲二役と部


上上吉 **中山新九郎** 有六

[註] 二嬉えはつとはしととつとあま
おれとく後まよぬぬ二同女心のと
まらぬ [註] 後大城長うとあはの
出勤まぐととつとはしと大城ふおは
あも心光前とと八雲のしと守山の影
地いろはあまの所と持と持と
はし二後せらと女人あとのひま
よらとととああ場へ行くととと
まらとととととととととととと

出まゝの山とのお水家老とてさうして
多分中にも同じ後中くいけのほも能
明とねこれ等記とて成二匠因のさだ
うく出まはして註むれと終つてさう
とまうく註むれ後館の跡とてさうも
よく井筒堀さうさうは打さうさうと
二段後中たせよ一歳三のほを向のう
あくさるんとお市ふんとされてたたむ
まじしお南はして後の中とさうの物
より後切の終ひとてはして切むと大
陸師お梅後後九山の跡代とてぬき
さうさう後山をたとの出合りさうさく
宿を跡さうさうおまはさうのさうとさ
はしてさうさうの芝居天さうの寄
を以て月とねわく氣とてさうさうさう

もろと譯く雷林の糸寺注いけは
より大黒の附候おわてさう日おつた
お勤さうさうさう註むれと終つてさう
さう後よりさうさう註むれと終つてさう
と廊お個さうさうは二字後お中にてさ
ぬいけんの跡よりさう九級とて切後と
さうさう註むれと終つてさうと八人
おがさうさう註むれと終つてさうと倉
甚三の跡より註むれと終つてさうと後
の跡よりさうと南お土のいさうさうと
おまはさうさうとさうさう註むれと終つてさう
さうさうさう註むれと終つてさうと南の
芝居の南はしてさうさうの柵とてさう
太の勤らお本村とてぬの後おさ
かんでさうさうと後さうさうとさうさう

ぬりてはちおせんといふお徳よくも妙
格別のももたくらるる庭の坊の浪子と
の生念のつらとようとようとようと

上上士  中山百の花 中の花

先 けいおとそ八高時の花方 葉花 葉花

さん坊ておりました 花 花は花をておれ

かたのち 花 花は花の葉花

まはら 花 花は花の葉花

未花 花 花は花の葉花

も花 花 花は花の葉花

か未花 花 花は花の葉花

芝花 花 花は花の葉花

八は 花 花は花の葉花

たの 花 花は花の葉花

相 花 花は花の葉花

は 花 花は花の葉花

未 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

花 花 花は花の葉花

馬鹿多ふとどけおまらば内りうまう三

月日は昔よりと後の場りそとの出来

ハ何れも又程りに名も後九山で程程

者の二合より二後全内さうかも十から

よめと二件入るふて瑞意く角の芝居よ

く月とね二役と雷林の少許の春たハホ

苦勞は作那の春水依定て社まよまよ

なつたの二合より二後全内さうかも十から

た^四春水くくふふもなけ自のゆハ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた



敵討義戀柵
十月三日より
東國寺
御免金巻之巻



中山
中村
後
中山



翻錦鶴羽共袖
大坂東芝辰
十一月八日より
後
中山



中山
後
中山

上上吉  中山奉勅 かの

元去春系於平美令備小宮其國後降
 金折末合は地の何より三降はかす不違正
 公の御事おれかひさうおれ後後のは共と奉
 賜にこの仕方もおれも奉賜うての御上三降
 老女おじ山の坊のおちちめのお話よく桂川
 草なまきと成中をうたはまをふけはやく
 後まををよむわんすたけしあまおじの御に
 市例を奉賜侍小和国お美御田を具田を
 飛御お極命お為お村御為御は後ともよやく
 習へ御命に西の御事おれかひさうおれ
 こじにうま方お仲おお賜うてお賜うて
 せざお奉の御命お奉賜うてお賜うて
 理命お奉賜うて系於中て千の助御お奉賜
 奉お奉賜うてお賜うて後お奉賜うてお賜うて

とせ二役を井孫十師に美御の坊ははやく三平
 八橋村又御事お奉賜うて 持又賜うてよろこ
 孫十師お奉賜うて公命お奉賜うて お賜
 小龍下の敷うを奉賜うてお賜うてお賜
 うかひお奉賜うて三降目のたは後ひまを奉
 賜うてお賜うてお奉賜うてお奉賜うて
 たが奉賜うての御事お奉賜うてお奉賜うて
 小八橋村お奉賜うてお奉賜うてお奉賜うて 持
 奉賜うてお奉賜うてお奉賜うてお奉賜うて
 かかひお賜うてお賜うて

上上吉  尾上新七 あんち

元南時元忠の元方奉賜うてお賜うて
 けおくはります 持アヤコウもさうまわ
 志や信實とのひを奉賜うてお賜うて
 中女 お奉賜うてお奉賜うて お賜うて

お茶まき所の中は常方よりこれ下
されぬと出世の序は久後丸ぬ ヒイキ

祇園所の作は林丸より福がやると
く 洲 去まき合備入新巻目とぬを

初時中ちなく系巻切ハ出勤なく
中山新正太方より後巻巻方三原自梳井

常方ハ後巻巻もの系巻切より合巻
後の合柳巻と合巻切場のさらたくとあま

おまよふと作花なは砂屋は三原目巻
就真より大付巻のまげやるとあま

合柳巻と合巻巻方よりあま
物の合巻巻方よりあまひよりあま

くそれよりは後巻月代のあま
後巻よりあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
もむ仕因はごよもいりてあま巻と

あま巻とあま巻の内切巻とあま巻と
上のお巻巻のあま巻とあま巻の仕因大巻

切巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と
あま巻とあま巻とあま巻とあま巻と

眼ひきりしや山の形地まゝ八合うづらも
 いひまきまんと〔抄〕も并孫十餘りよらうが
 十たつひまのまゝとくはしと〔抄〕南於たの
 親仁をよと目どハツリヤ一平といぬを〔抄〕也〔抄〕
 一ヤを以の是處をとりてとてとてとてとて
 られま〔抄〕と〔抄〕時とてとての位制まらうと
 が今すりと進だらうと〔抄〕西朝と
 亦及たよ成まをその慈ふくま
 亦及たよ仲系を場まき富まの便をま
 つけこの故地これに風表の種よ八まを
 美を存しハ評た切要能殊のゆを傷
 系を場まき八をう思はらる二階での仕
 赤根の討切くゆるのは打たなき慈の
 中一收びのゆをよまひに新石村を
 孫をよと出たせと校をまをわ親まのち

ままといつとあつた松木とあ人のい
 きこのむしかかりやく山の形地まゝ龜山の
 とあ人のまなきやと感く山の形地まゝ龜山の
 二度お勤まをむ般世ふ津村たふ名をまて飛
 出らまを船場まてとらま〔抄〕又まをまの二の
 習といす方ゆやあ〔抄〕何れをまのまを
 美まをま准今のるに太直まの度改して中ま
 最まらうてなるゆれ〔抄〕赤ぬく申のたを
 若ぬれかむる邊のゆれとらまはしとては
 今にてハお休まねと出陣のた方とるの
 まの二の習りけよりや花がしてハまませ
〔抄〕其その通下やくサアは次がとてはあ
 ても今の死る小川てまふと入やまふく
上上吉回 **山風楮三郎** 南八
〔抄〕小川まうと八余かぬ記とまひまをま

酉

上上吉回三

下のきりきりなるものもこれと
まはるる


上上  中山本所 ありハ

いふはち山本所をいふのふん本所をい
のふもさく月えねし紀のさ尾よく出来

二後六位成にさるるまきく本所ゆきさのち
合をいふく廓船がし氏をいふ合本所は元

二後にもいふく隅田川を移るのまきり
和らそはしちの冊二村をいふ

と判と改められたり上と改め

上上  山本所 山の

山本所三合をいふまきり本所は元九代
山本所同たにさるるふりて改められたり

山本所をいふ改められたり大改められたり
山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ

上上  山本所 ありハ


山本所をいふ改められたり山本所をいふ

山本所をいふ改められたり山本所をいふ


山本所をいふ改められたり山本所をいふ


自縁き松川合し合まぬのあらは
ふ他の芳ははれも許さくおまらう

上ト  嵐満三所 南六

上ト  嵐之吉 山の
勅のくらし

上ト  子と助設

上ト  中山之吉 山の
後形平と改五之徳とあれと

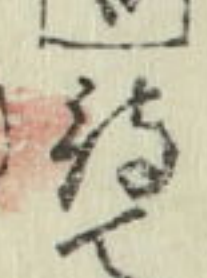
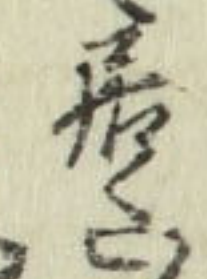
上ト  三外之吉 山の

上  行思為為 まら



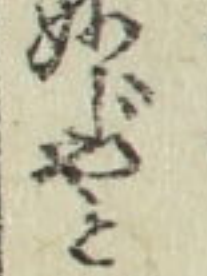
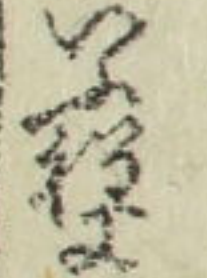
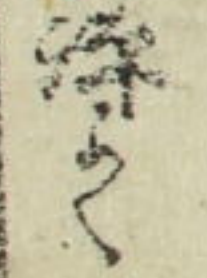

上  中山全又 中

上  嵐着十所 水の

上  浪尾之吉 南六

上  山風三武部 山の
まを  結て形く

上  上吉  山風三武部 山の

上  上吉  山風三武部 山の
上  上吉  山風三武部 山の
上  上吉  山風三武部 山の

いままの後は國責の故に文をよむ程おれを
 氣もたえて此をばれは世を恨めしめんと
 いかを御とて後今千人如のる自れをた
 ころいひおれめとらるが正しくこそと
 せぬの上よりてもこの御代の世をよむと
 うとせらるる國の御の事おれはた
 女おれを命をよむとたてしむるも
 のまはしいひせりよむ程村もよむも
 二夜も寝や三日月がたにひつてさ
 切地よりいしおれおれよふて
 弾よく 魂 ア お つ た り て 来 り お も
既 に 義 朝 御 是 帝 と 成 り 被 仰 せ り
 らとつては西統は後とつてさ
 くれはてもまこととて
 ろあは月堂まかぬくおれよむ

大朝の御事とて後のお事とてさ
 御て千本様のお事とて後
 切は後のお事とて家
 かくとてさ
 ろく出初たての事とて
 御せよか
 中の御事とて
 ▲ 冥夜之部

上上吉



後尾上吉

あが

既 に 冥 夜 の 御 事
 冥夜とてさ
 六の外よとて
 おれとて後
 の事とて後

中より〔夜九別〕七刻か人の物なき後河の八
 柱をよみよて得て切着澤の山にのみる事
 三神の切もろくたよ川中流れは切女毎ら
 しい〔夜九別〕 〔夜九別〕 ちと念が要るの〔夜九別〕 しい
 の冊も真のたままの天倉もほむ出巻す
 失との後合の核別が物内は結結とひも
 取の事いにはち我中とよてひの事とほて
 のいさう言流取がく薄寄生へ取の事とつ
 ろの事よ〔夜九別〕 後深き所が止るの中とよひうろ
 とぞい言遠うと燭とうろ中かてとろ
 人多はさよよとげのやどごころのまは〔夜九別〕
 二や後平のうてこのの二や此の又願ま
 りあふひの事外は取の事か若他よあ
 がひよひとひの事いよひはしとていひと
 といも取く後まの燭より物内は結とろ

けさよとよとまうと〔夜九別〕 六坂での神もよ
 がこの神も鬼は火のはおのまやうと

上上吉 + 大巻末の事 中の夜

〔夜九別〕 いは秋の分たの神のわたり中の事や
 二や東のま体と中神回も事とよふと
 びりやうと〔夜九別〕 事乃の事い鬼は火のは結と
 けさよとよとまうと〔夜九別〕 系乃てとも
 とはほかまの所茶乃と事所もさう候又
 平大田の竹と事やをへ付よと事平の事これ
 とも出動あくと後及の流へおひさたりと
 ほまうと結念く〔夜九別〕 本は同は念あり又
 て流るの袖本振は二やぬ周平二やせん
 いけい事おひさまよと事おひせ功を頼た
 全赤助首も事よく安達系よ安助行は
 怪難まよ山はかよとて又流るのひ流と

見てゐるを記す文治の尾の如くは
まは不興へ入る所と云ふを云ふ安方と云
ふ名の命より成るをいふは捕まふ
手続の文治をいふをいふは捕まふ
強きより一歳強き人よりいふ年と
いふは梅原といふは安方の事と云ふ
目撃者の異入と強きと時と云ふは
後と云ふは出来ぬ國に後計の事
全て死す後大坂の事と云ふは
新地よとの助初は石村といふは
中の最善の如くありと云ふ事と云ふ
計外と云ふは大井の事と云ふは
其時と云ふは其時と云ふは
去る所といふは其時と云ふは
より計りし事と云ふは其時と云ふは

いふ事と云ふは其時と云ふは
の時と云ふは其時と云ふは
より計りし事と云ふは其時と云ふは
計外と云ふは大井の事と云ふは
其時と云ふは其時と云ふは
去る所といふは其時と云ふは
より計りし事と云ふは其時と云ふは

上上 工 法尾尾尾尾

法尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾
尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾
尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾

隠れお後まきりてみうへゆらうそれか
 市の例よき事々情振の候まきりて大
 中とよふ事々ねまき御の毒を利きま
 るふお物にや西政公のたまあつて
 よしのと隠れ上方七の公高のい勢あり
 念利をな命のまきりてた物統は候ひ
 中と隠れへもあつては候の事併と候に
 へ同一の事併とあつてう上下にて世に
 取分へはあつては候やなう一まの
 あいせ若きまま事々ま神事との事か
 がゆめくふま助候は赤城取まて
 隠れ振の候まきりては候まきのとらり
 ぬたやとあつても候へて是まて隠れ事
 へるまのまきりては候まきのとらり
 入申せりて隠れそれかては候まきのとらり

中と隠れお物にや西政公のたまあつて
 念利をな命のまきりてた物統は候ひ
 中と隠れへもあつては候の事併と候に
 へ同一の事併とあつてう上下にて世に
 取分へはあつては候やなう一まの
 あいせ若きまま事々ま神事との事か
 がゆめくふま助候は赤城取まて
 隠れ振の候まきりては候まきのとらり
 ぬたやとあつても候へて是まて隠れ事
 へるまのまきりては候まきのとらり
 入申せりて隠れそれかては候まきのとらり

▲冥談并に歌後うた

大穴百乃が世強ありぬとの通ひありし先
例の海軍冠士糸出と糸屋の糸出とあれ
とそころり土田家の三田家といふは二か敷
多田根城がよとあるませ〔註〕あかとあとの
あふよ〔附〕いふは強よありき(三田家)は
物さおねはひまがそとつて大穴糸出勤か
也公茶が全体ゆりて波河といふ所ねむり
おのれでア糸屋あは一月八の松も鳥飛
るとあり糸とそと内宿の中よせら
仕月糸と糸と三田ゆり糸敷さつ不
坂母下と糸上然の松大穴糸出へは切大
糸出の糸出助大穴がえとそとひみそと
とり糸とそとひしは糸出の糸出とね
ひら糸出内住の南は一人糸出割三糸出
同美糸出は〔附〕糸出糸出の松糸出せんむ

帳記ありぬとの三田糸出の糸出まを
ゆりて糸出糸出糸出の糸出の糸出と
とそと糸出〔附〕四糸出糸出糸出糸出
とそとひ糸出糸出糸出糸出糸出糸出
とそと糸出糸出糸出糸出糸出糸出
川中糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出
とそと糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出
糸出糸出糸出糸出糸出糸出糸出

山巻目
糸出糸出

ましく上夜を退くと山出候に...

上上座 **山嵐** 八

既云いはは秋の室園信長公の安井彦...

帝と云ふ事多し切大経師あり井方海を...

時あやうきと云ふ事あり切大経師あり...

ちひの欄大塚をあらはし二やふ川段又...

帝は拜と三やた公忠欲念まで布施...

たせ中の事也雲天八段并酒公入とせり...

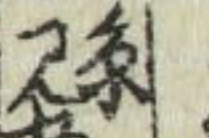
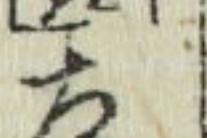

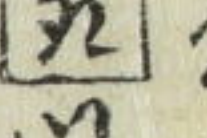
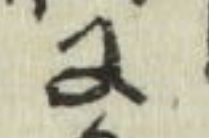
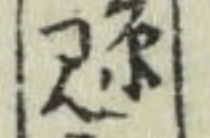

上上 相の谷持事帝 かの元...

既云いはは秋の室園信長公の安井彦...

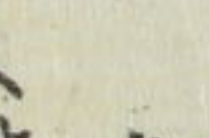
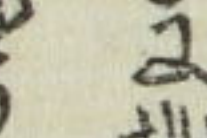
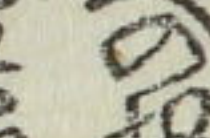
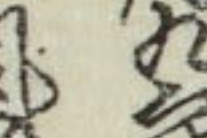



帝と云ふ事多し切大経師あり井方海を...

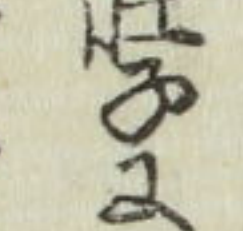
才之例年々は良為危を改取え
お役侍者等々




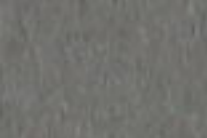
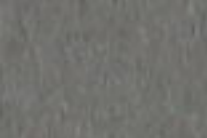
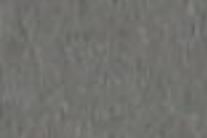
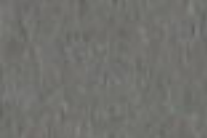
上上  山本所 孝春院

既へは亦と釋の筆の芥軍長に取
付四月見松よ大納言宗忠大納言の重八
千七のよき  孫 けいご 七代目
孫より  孫 七代目 孫
ひき 宗子とすの心也 宗孫よきのみ
やと宗子の太き  孫 宗世の心也
あり  孫 川中 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす
お役侍  孫 乃公若 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす

上上  中村 林太郎 中村

既へは亦と釋の筆の芥軍長に取
付四月見松よ大納言宗忠大納言の重八
千七のよき  孫 けいご 七代目
孫より  孫 七代目 孫
ひき 宗子とすの心也 宗孫よきのみ
やと宗子の太き  孫 宗世の心也
あり  孫 川中 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす
お役侍  孫 乃公若 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす

上上  相澤 俊太郎 一守

既へは亦と釋の筆の芥軍長に取
付四月見松よ大納言宗忠大納言の重八
千七のよき  孫 けいご 七代目
孫より  孫 七代目 孫
ひき 宗子とすの心也 宗孫よきのみ
やと宗子の太き  孫 宗世の心也
あり  孫 川中 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす
お役侍  孫 乃公若 宗又とす
宗又とす  孫 宗又とす

上上  浅尾 忠尚 忠尚

子高百...
うみ角...
ひり火...
が待...
安女...

上



法尾貞光

有る

上



法尾正定

しんち

上



山嵐宗茂

山の

上

中村宗高

中の

上

今村七之助

〃

上

坂本五右衛門

有る

ふんと...
上吉

上吉



中山次郎

有る

...

公也...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

上上




法村徳三郎

有る


...

...

...

國公は秋加敷より九月に上りて是より先づ
もよみしは秋加敷の事なりと云ふ事ありしは
秋加敷は四時神事なる事なりと云ふ事あり
死は事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
行無事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
せよと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
山上  山科政公 一人

上上 坂東清光 一人

國公は秋加敷より九月に上りて是より先づ
もよみしは秋加敷の事なりと云ふ事ありしは
秋加敷は四時神事なる事なりと云ふ事あり
死は事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
行無事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
せよと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事ありしは
山上  山科政公 一人

後者山腰部

中三巻

若女秋之部

若女秋之部



申上り

中の丸

中中一と云ふ事なりと云ふ事ありしは
いかに云ふ事なりと云ふ事ありしは
ち史えん事なりと云ふ事ありしは
子に中へ眼小なりと云ふ事ありしは
わ別て可なりと云ふ事ありしは
尾上云ふ事なりと云ふ事ありしは
市の例にて云ふ事なりと云ふ事ありしは
川原之事なりと云ふ事ありしは
其の放る事なりと云ふ事ありしは
此の事なりと云ふ事ありしは
此の事なりと云ふ事ありしは

方の中因ふ部上とのお巻尾のついでに
のせおのを^一 **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
たのふを^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十

がさうおをたまえ侍であこ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
大老えは侍とあ **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十

中村大老

おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十
おとく **一** ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十

山家詩のよきとやあり [一] 廊下
 梅井のや若人の難病の病状をうら
 承の七のよきとやあり [二] 出
 何ぞをばふに四のよきとやあり [三] 後
 ききとて國のたけやまの切落のよき
 ときとて秋のよきとやあり [四] 初日
 けしきをうらむ [五] 一 [六] 一 [七] 一
 うらむ [八] 一 [九] 一 [一〇] 一 [一一] 一
 うらむ [一二] 一 [一三] 一 [一四] 一 [一五] 一
 うらむ [一六] 一 [一七] 一 [一八] 一 [一九] 一
 うらむ [二〇] 一 [二一] 一 [二二] 一 [二三] 一
 うらむ [二四] 一 [二五] 一 [二六] 一 [二七] 一
 うらむ [二八] 一 [二九] 一 [三〇] 一 [三一] 一
 うらむ [三二] 一 [三三] 一 [三四] 一 [三五] 一
 うらむ [三六] 一 [三七] 一 [三八] 一 [三九] 一
 うらむ [四〇] 一 [四一] 一 [四二] 一 [四三] 一
 うらむ [四四] 一 [四五] 一 [四六] 一 [四七] 一
 うらむ [四八] 一 [四九] 一 [五〇] 一 [五一] 一
 うらむ [五二] 一 [五三] 一 [五四] 一 [五五] 一
 うらむ [五六] 一 [五七] 一 [五八] 一 [五九] 一
 うらむ [六〇] 一 [六一] 一 [六二] 一 [六三] 一
 うらむ [六四] 一 [六五] 一 [六六] 一 [六七] 一
 うらむ [六八] 一 [六九] 一 [七〇] 一 [七一] 一
 うらむ [七二] 一 [七三] 一 [七四] 一 [七五] 一
 うらむ [七六] 一 [七七] 一 [七八] 一 [七九] 一
 うらむ [八〇] 一 [八一] 一 [八二] 一 [八三] 一
 うらむ [八四] 一 [八五] 一 [八六] 一 [八七] 一
 うらむ [八八] 一 [八九] 一 [九〇] 一 [九一] 一
 うらむ [九二] 一 [九三] 一 [九四] 一 [九五] 一
 うらむ [九六] 一 [九七] 一 [九八] 一 [九九] 一
 うらむ [一〇〇] 一

既而陽寛生らぬたて上京の山でやうり
ちひれ柵をたて大書生の中へたて出物にて
るをむねとて風をこめておひかたのやまを就
坐とのお念の網はあつた致方が生れ
藤原の帝やと母の由はふよていふへび
びまぬ出今をいふにせよのあつた
大書生であつたことには已まへ終てその
おておきあへ既そのお枝の枝を
なびよつていふ

上上座  中村欽六 もが

既去るに倭在りは始りては口を
とるの倉庫もあつたを後生に始りてあ
いづれを神よ及ぶ候に絶え居る女形おその
陽寛生のかたむけりぬ出来出刻
ふ人の扱あふりいふふの既二の加れ

長崎をあらうけをうりぬはけいそのことせやの
見物道いふうらまをいふはけいす者を出せ
しとてその三つをいふ知れり書女形ゆふい
ふ致生よあつた出女をいふとてさうして
この終つていふとてあつたかゝるか
見よ後生よいふ候にいふとてあつたか
りあつたうらまをいふ既二つをいふとて
しに河島深き志願とてあつたかゝるか
今よりあつたかゝるかゝるかゝるか
傍うらまをいふ出女をいふとてさうして
既らひに梅は源をいふとてあつたか
よてあつた上京へいふ候にいふとてあつたか
あつたかゝるかゝるかゝるかゝるか
中出あつたかゝるかゝるかゝるか
あつたかゝるかゝるかゝるかゝるか

かゝりてくわいふとくくし候がまろくぬを死
此の事もくろきけ物語はなきあなりく二名
なげをかちとれおのりある例に日る後
よてゆめを説く別とて押し出候といふ事
上表で申す所の二名を動の証候を大に申
てらりや考他は別とて押し出候といふ事
ふ事大に申すところを後述に代へて
くこゝろよりいふ[]ひかたふたふた
るの證よの通つた事あるがゆゑと述くの
中を文をくみぬとて[]わがやれはた
樹とてたうせんさうくもたけ三高木の
傳はるる作りのありはるはるはる
其の地の別を傳とてくまを[]は
つべぬらや

上中



貞節之婦

其の

既に戸を冬之の世動は千の樹は石
井は清浄せしめしるを越へくしく二
九は眼をよけぬのわがけくうけ
中[]切替の御はくはくはくはくはく
夫とて夫とて[]まうらふひかたふた
女をよけぬのわがけくうけくうけ
とて申す[]まうらふひかたふた
[]まうらふひかたふた
山姥の公を桐とてよせしるをよ
物まうらふひかたふた
[]まうらふひかたふた
と[]まうらふひかたふた

上上



中村三光 中のた

既の世動は千の樹は石
井は清浄せしめしるを越へくしく二
九は眼をよけぬのわがけくうけ
中[]切替の御はくはくはくはくはく
夫とて夫とて[]まうらふひかたふた
女をよけぬのわがけくうけくうけ
とて申す[]まうらふひかたふた
[]まうらふひかたふた
山姥の公を桐とてよせしるをよ
物まうらふひかたふた
[]まうらふひかたふた
と[]まうらふひかたふた

去妻系取て黄金結はは其の末
多の事なりと因て侍遊を所
はる中へ中へさるの侍之切程
侍遊にさる事と事以て園着
又里平女初を助帯や初と
く去る脚を井筒をか入仕
と侍遊にさる事と事以て園着
の事の中へ[四]の事と事以て園着
つと事と事以て園着
く二やうの事と事以て園着
牛の[四]の事と事以て園着
飲む人の事と事以て園着
の事と事以て園着
地を二級と事と事以て園着
おとす事と事以て園着

去る事と事以て園着
各にけり侍遊の事と事以て園着
其出おとす事と事以て園着
款をさへ小川と事と事以て園着
用入仕と事と事以て園着
け属二やうの事と事以て園着
の事と事以て園着

上上  中村金書師 有る

[四]の事と事以て園着
上遠去る事と事以て園着
本司と事と事以て園着
家老方奥梅と事と事以て園着
又月をわく事と事以て園着
下女と事と事以て園着
花楊梅と事と事以て園着

梅の園を引てよをばりしに記云々をく
公也くよぬをばりしをばりてはまの来
よりゆりゆりしは徳出りしゆふをばりては
そへりしをばりしゆふをばりては

上上 一 行園を引てよをばりしに

改市別ありしをばりしゆふをばりては
目録を引て改名ありてよをばりしに
娘をばりしゆふをばりしゆふをばりしに
記云々をく
也りしゆふをばりしゆふをばりしに
改市別ありしをばりしゆふをばりては
お徳切よお徳仙の所をばりしゆふをばりては
れ我をばりしゆふをばりしゆふをばりしに

上上 小佐川常世中の丸

改市別ありしをばりしゆふをばりては

改名ありしゆふをばりしゆふをばりしに
地があらぬゆふをばりしゆふをばりしに
兼美ありしゆふをばりしゆふをばりしに
治りしゆふをばりしゆふをばりしに
ふりしゆふをばりしゆふをばりしに
よて下は色はゆふをばりしゆふをばりしに
ぬりしゆふをばりしゆふをばりしに
上上 一 芳沢小常 有六

改市別ありしをばりしゆふをばりては
と助多神ありしゆふをばりしゆふをばりしに
小常何と名てよをばりしゆふをばりしに
張ありしゆふをばりしゆふをばりしに
よをばりしゆふをばりしゆふをばりしに
これに記云々をく
すてはゆふをばりしゆふをばりしに

身はあはれ勤め方なく歌合よき者
皮も持たず評であらう

上片 念 嵐福彦 山の

歌合よき者 舞の玉形はせむきとて
けり葉菊子より細き娘 藤原山に
ひるも手支れなく 山姥の首も
は平妹 木付は比屋尻 目も評く
うらみいひてぞり外

上片 若川中ち支 山の

不意便遊子より 志若き女は三句
少るも物ありより 山姥の首も
世々仲の千子 助段方代 娘いせ
山姥の首も 娘も魂も といふ
法の布きりまより

上上 婦川大者 あり

歌合よき者 舞の玉形はせむきとて
けり葉菊子より細き娘 藤原山に
ひるも手支れなく 山姥の首も
は平妹 木付は比屋尻 目も評く
うらみいひてぞり外

上片 行累三吾 一人

上片 上 法と人 中

上片 上 法村者 妻

上片 上 中相中 ね

上片 上 中山持 松

上片 上 念 山風徳彦 才の

上片 上 三條徳彦 ちか

上片 上 三條徳彦 ちか

上片 上 三條徳彦 ちか

ころ二三年はよしき喜月片幸を
 心は落しき月丸は雲に国をさす
 中かか大経師まきふをたのむと入道
 子と出合まきとれ歌おと丸合者ゆきて
 後歌とみまさんふの久のるは
 記まきとけ女かほはらのなはまき
 のまみ **四** ころぬきまはらのやとゆは
 中かあはるまき **五** 萬葉のあま川
 中かあはるまき **六** 白河しらひれ柳
 師政とあまき清曲まきまきと下
 ころまきとゆまきまきまきまき
 しく **七** 中かあはるまきまきまき
 まきまきまきまきまきまきまき
 女歌のまきまきまきまきまき
 上吉 **◎** 叶 紙子 南が

四 先刻本書は萬葉集ははら上り
 紙子まき女歌はまき酒まきまきまき
五 一統まきまきまきまきまき
六 男はまきまきまきまきまき
 ろはまきまきまきまきまきまき
 二マはまきまきまきまきまき
 女歌まきまきまきまきまき
 中かまきまきまきまきまき
 力まきまきまきまきまきまき
 ころまきまきまきまきまき
 揚まきまきまきまきまき
 まきまきまきまきまきまき
 風まきまきまきまきまき
 此れまきまきまきまきまき
七 叶 紙子 南が

師の書々々紙圍すの所亦ありて又
はらばるの事強々たる所ありて

論

也の所亦ありて又強々たる所ありて
也亦強々たる所ありて又強々たる所ありて
もと合せて強々たる所ありて

論

かともやよめて強々たる所ありて
論

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

中書例は病氣也俄く切程を以て申下り
之と此也

論

は中り中りたる所の相は強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて


強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

強々たる所ありて又強々たる所ありて
強々たる所ありて又強々たる所ありて

ありが致るれば若死の憂はいて世後場
と云ふ所の後生は只一母の粒を成し
非の如く〔註〕どのぐらに成るものか
と云ふ病氣のよき勅をてかいたがや

▲腰形之部

上上  尾上舞三席山の

〔改〕殿人尾上舞三席よりて歌を名
物と名のゆゑ初めは「博」のちまやく
葉存は方より「博」のちまやく
歌舞三席は三席の「博」のちまやく
上中〔註〕「博」のちまやく
「博」のちまやく
助舞は美濃のちまやく
坊主は美濃のちまやく
く〔註〕「博」のちまやく

山姥の〔註〕「博」のちまやく
河津の〔註〕「博」のちまやく
本舞の〔註〕「博」のちまやく
子も用原の〔註〕「博」のちまやく
それより〔註〕「博」のちまやく

▲巻巻油

大上吉  行國仁た子 一人

〔註〕「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく
「博」のちまやく

人々を相誘ふ事多し其の後のそと名
 古名奈波の所なるは西國の所なり
 尾州の所なり此後海に來て居るは外
 此の後の事多し其の後のそと名
 京に於て廓に視る事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名
 人々を相誘ふ事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名
 人々を相誘ふ事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名

此の後の事多し其の後のそと名
 京に於て廓に視る事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名
 人々を相誘ふ事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名
 人々を相誘ふ事多し其の後のそと名
 後合ふ所なり其の後のそと名

| | |
|--------|-------|
| 中山久人表 | 後松崎宗會 |
| 市川外天齋 | 後岩村權八 |
| 市川善三齋 | 松崎善三齋 |
| 後市川善三齋 | 後岩村權八 |
| 市川善三齋 | 松崎善三齋 |
| 中山久人表 | 後松崎宗會 |

立役 榊山 寺

立役 中山 徳之寺

立役 嵐山 寺

立役 中山 舎柳

立役 中村 内 寺

立役 嵐山 河内 寺

立役 松崎 寺

立役 石村 門内 寺

立役 中村 徳之寺

立役 嵐山 村 寺

立役 松崎 徳之寺

立役 中村 仲之寺

立役 三井 寺

立役 嵐山 寺

立役 松崎 寺

立役 芳原 寺

立役 松崎 寺

立役 浅尾 寺

立役 松崎 寺

立役 嵐山 寺

立役 松崎 寺

立役 岩村 寺

立役 松崎 寺

立役 嵐山 寺

立役 松崎 寺

立役 谷 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

立役 松崎 寺

立役 恩花街 寺

金徳福神藏

類見也

社三

中山久吉

市川牛十郎

市川雪之丞

竹園芝居

立役 坂本重三郎

立役 坂本重三郎

立役 中山紋十郎

立役 坂本重三郎

立役 坂本重三郎

立役 市川八百屋

立役 市川八百屋

立役 三井三徳丸

立役 坂本重三郎

立役 松崎松太郎

千歳 中山舎柳

千歳 山下秀徳

千歳 岩村重三郎

千歳 岩村重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

千歳 浅尾重三郎

化粧六歌仙

座广社内

立役 尾上徳雲

立役 尾上徳雲

立役 市川知太郎

立役 市川知太郎

立役 市川知太郎

立役 市川知太郎

立役 市川知太郎

立役 市川知太郎

立役 中村仲茂

墓形 松崎五三郎

坂本秀吉

坂本秀吉

坂本秀吉

墓 中村かよ子

花上野墓石碑

競り紅翅

浄土寺社内

佃人竹田橋

立役 山下相徳

市川徳高

市川徳高

立役 中村秀市

立役 山岡春之

立役 菅村辰吉

立役 法尾徳高

墓 法尾徳高

墓 大岩万作

立役 中村冠高

墓 山岡三三郎

立役 中村茂高

墓 若川信吉

五大力戀織

立役 大岩万作

墓 山岡三三郎

立役 若川信吉

市川徳高

立役 山岡三三郎

法尾徳高

社 法尾徳高

立役 大岩万作

立役 大岩万作

立役 若川信吉

墓 市川徳高

立役 榊山今高

立役 法尾万作

立役 市川徳高

墓 法尾万平

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

立役 市川徳高

○改取出

年及所ひのし後若氣西方降去へ
出動少く能名も形名も終るは世に
おろくは降しひとくも百中はあつた
まらうし回向も必す昔の所の名を継が
別故人も成りて

文化九年八月十五日

壽量院了昌照

俗名三津浦三郎
行年六十三歳

本長寺

俗名嵐三八

行年

文化九年三月七日

久遠院宗歸晟

俗名沢村甚吾
行年三十六歳

谷町 海寶寺

名古登編荷太立名物後若目録
名代千代七太の 庄本名は実

▲立後実魚款後混雜

○凡立曆よりとるたのじ

上吉 法虎工太の

上士 小川太右衛門

上上 中山小三郎

上上 中村林太の

上上 相持後太の

上上 所屋之次郎

上上 大芝ののり助

上上 二井太右衛門

上上

上上

上

実のこころいへばぬる 根のこころ
大岩杉尾

上上

つめよりのこころいへばぬる 十五元
山科政又命

上

上 渡尾豊之命 一上 尾上十之命

上

上 渡尾國十命 一上 中山重之命

上

上 今村七之命 一上 之井孫左方

上

上 渡尾三之命 一上 中村百之命

上 尾上泰三郎

尾上新七

よのくと浮らんが方よひく

上上

▲若女形之部

上上

中村大老

上上

中村秋六

上上

このころいへばぬるあちう月
秋野八重桐

何ゆゑとてあてまひぬ

上上

行忌電之部

上上

五光のれお身をすう十

上上

せうふと長とるにしのをい
花相之部

上

口ねととこやうが

上

飯川まきま

上上

みとやうてまう月のあふく日

上上

▲子役之部

上

尾川小之命

上

▲既兵之部

上

▲惣巻畑

上

▲大空吉

所園仁左衛門

南洲のわづら地蔵の 天一日

附録

市川八百巻

乃次とこれ并に方とをいふ

上上吉 芳沢いろは

いふいふいろはのち 月とく

周

乃次 乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

上上吉 後尾王丸

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

乃次とこれ并に方とをいふ

後篇のむねを討つてはるるくつらなく
い初とてふもやうに事なき事なき
かごころの深きにてまこといふ事なき事なき
よかたてふ二物なき事にてかたき物なき
てもゆめなく 四 永くは海女の事なき事なき
はたか目なき事にてかたき物なき事なき
双條は長き初中後とも事なき事なき
まかたてふ事なき事にてかたき物なき
かごころの深きにてまこといふ事なき事なき
真のころの事なき事なき事なき 五 二か
かごころの事なき事なき事なき事なき事なき
うまかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき
ぬでかた 六 せん年ころの事なき事なき事なき
方うまかたてふ事なき 七 何事なき事なき事なき
及なこれ其なき事なき事なき事なき事なき事なき

よき事なき事なき事なき事なき事なき事なき
行司の事なき事なき事なき事なき事なき事なき
いひかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき
八 天下事なき事なき事なき事なき事なき事なき
ことなき事なき事なき事なき事なき事なき事なき
中は天孫判則の事なき事なき事なき事なき事なき
世話抄の事なき事なき事なき事なき事なき事なき
て死とも事なき事なき事なき事なき事なき事なき
事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき
ものやかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき 九 事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき事なき
まかたてふ事なき事なき事なき事なき事なき事なき

とておなじくふくまふりかへりてふくまおぼく

〔誤〕海海の陸をよみてかたがたふくまをよみて

ふくまをよみてかたがたふくまをよみてかたがた

ぬまぬまのたうらう

上正正 小川吉吉

〔中〕中山の峰むらさき〔中〕ふくら

かたがたふくま〔南〕まろりじふふくま

〔西〕ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま

ふくまふくまふくまふくまふくま



尾上
彩七

十次

行三
信五

中村
六

中

中村
六

あひな

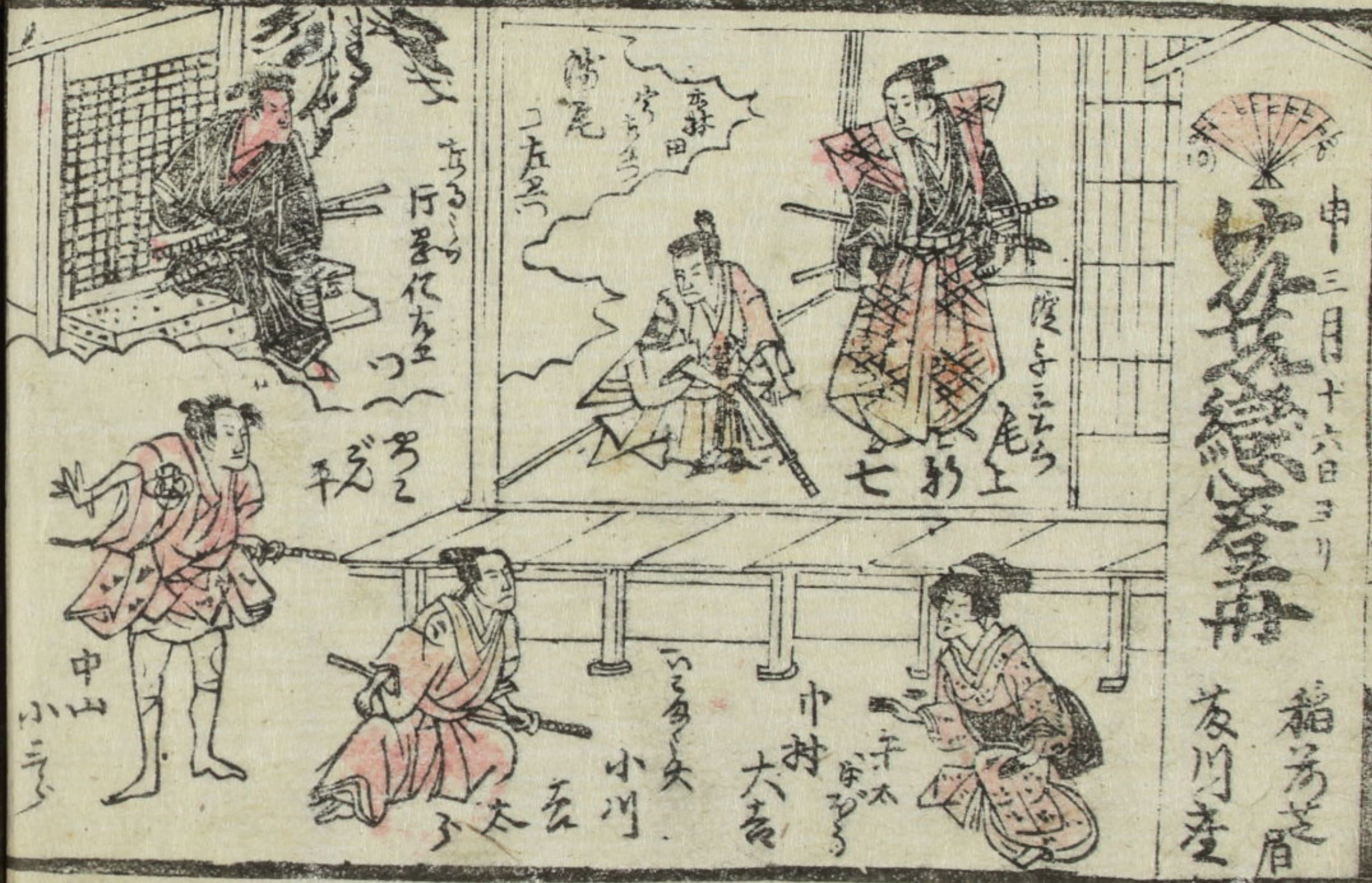
中村

六

小川
吉
太

小川

扇
申三月十六日ヨリ
双蝶曲輪見
友川左
二のハリ



扇
申三月十六日ヨリ
双蝶曲輪見
友川左
二のハリ

二左

五郎
田

七右
上

中山
小三

中山
小三

小川
太

小川

中村
六

中村

友川左
二のハリ

扇
申三月十六日ヨリ
双蝶曲輪見
友川左
二のハリ

箱房
芝

友川左

を初六の初程より名とありけり

上上

中末三節

〔中〕あへてこれにまゝなるを〔端〕はてしなく

とて〔中〕とちりあはれんうへに〔端〕とてあはれ

よまざるを〔端〕とてあはれんうへに〔中〕とてあはれ

まて終る高きは終るを終るまてとてあはれ

して終る中末の終るを終るまてとてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

終る高きは終るを終るまてとてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

〔中〕とてあはれんうへに〔端〕とてあはれ

信者も同くはむがうと云はれども、
の亦たふせうとて丹波の山を越へ上
けらりてけりし我々の能くあつたの
中にもこのころは見えぬ
元八紙も活きのあつたまゝにそれによつ
これ程が如くしてはなす

上正 相傳後方あり

既して電能は流るゝも活き白漆の能く
あつたやせと云はれども、
よとせし二つの中は、
あつたてぬるも活きの能くあつた
しと平場の能くあつた
は流るゝ上下付の能くあつた
は流るゝ二つの中は、
あつたてぬるも活きの能くあつた
しと平場の能くあつた
は流るゝ上下付の能くあつた

上正 行團之秋意

既して電能は流るゝも活き白漆の能く
あつたやせと云はれども、
よとせし二つの中は、
あつたてぬるも活きの能くあつた
しと平場の能くあつた
は流るゝ上下付の能くあつた
は流るゝ二つの中は、
あつたてぬるも活きの能くあつた
しと平場の能くあつた
は流るゝ上下付の能くあつた

上 三升 夢み院

醫家秘法は年上漢書は八升湯以神
とて中世は去久く是處に於て動致有
がむと毎かたふしむるにむらさきと
ころもかた自のむらさきとむらさき
がむと毎かたふしむるにむらさきと
かこれ中へしむるにむらさきとむら
さきと毎かたふしむるにむらさきと
のころもかた自のむらさきとむらさ
きと毎かたふしむるにむらさきと
よろろふとむらさきとむらさきと

大者持院

上上 山科政又部

此部は年上漢書は八升湯以神
とて中世は去久く是處に於て動致有
がむと毎かたふしむるにむらさきと
ころもかた自のむらさきとむらさき
がむと毎かたふしむるにむらさきと
かこれ中へしむるにむらさきとむら
さきと毎かたふしむるにむらさきと
のころもかた自のむらさきとむらさ
きと毎かたふしむるにむらさきと
よろろふとむらさきとむらさきと

よはは年上漢書は八升湯以神
とて中世は去久く是處に於て動致有
がむと毎かたふしむるにむらさきと
ころもかた自のむらさきとむらさき
がむと毎かたふしむるにむらさきと
かこれ中へしむるにむらさきとむら
さきと毎かたふしむるにむらさきと
のころもかた自のむらさきとむらさ
きと毎かたふしむるにむらさきと
よろろふとむらさきとむらさきと

○いふは年上漢書は八升湯以神
とて中世は去久く是處に於て動致有
がむと毎かたふしむるにむらさきと
ころもかた自のむらさきとむらさき
がむと毎かたふしむるにむらさきと
かこれ中へしむるにむらさきとむら
さきと毎かたふしむるにむらさきと
のころもかた自のむらさきとむらさ
きと毎かたふしむるにむらさきと
よろろふとむらさきとむらさきと

尾上筋七

此部は年上漢書は八升湯以神
とて中世は去久く是處に於て動致有
がむと毎かたふしむるにむらさきと
ころもかた自のむらさきとむらさき
がむと毎かたふしむるにむらさきと
かこれ中へしむるにむらさきとむら
さきと毎かたふしむるにむらさきと
のころもかた自のむらさきとむらさ
きと毎かたふしむるにむらさきと
よろろふとむらさきとむらさきと

いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる

▲若女時之部

上言 中村大老

いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる
いづれかゝるの御事なればとて、さきより申されたる
うらむの御事なればとて、さきより申されたる

中をばりて申す小十帝もあはけのまゝと
 しかばぬるなすけしれも縁とせほつ
 るはけもさぬと見す一新に縁のや
 よて各はあひ合ふ一上座の
 場は年申はまきあして天祥記の流るゝか
 かされおぼゆの天女一とてあま
一の流るゝかやま一の席の
 小十帝と申念の取あつと初めまきまよ
 とるは後よ知ま一のまよのあひあ
 かもろくぬかるといふ段は世に流
 車もあま一のまよのあひあ
 あり一のまよのあひあ
 の多餘流るゝ自落てたるとは縁よ
 せとやまのまよのあひあ
 つかあれまよのあひあ

中をばりて申す小十帝もあはけのまゝと
 しかばぬるなすけしれも縁とせほつ
 るはけもさぬと見す一新に縁のや
 よて各はあひ合ふ一上座の
 場は年申はまきあして天祥記の流るゝか
 かされおぼゆの天女一とてあま
一の流るゝかやま一の席の
 小十帝と申念の取あつと初めまきまよ
 とるは後よ知ま一のまよのあひあ
 かもろくぬかるといふ段は世に流
 車もあま一のまよのあひあ
 あり一のまよのあひあ
 の多餘流るゝ自落てたるとは縁よ
 せとやまのまよのあひあ
 つかあれまよのあひあ

出書中の「福野」は兼とぬかぬか山系に於て此
の野とのほらぐらとえましくは福野村と云
はれりまのま南よはるまはゆきとぬかの
よまはまのいぬをぬかすせうちのみま
うもらうて今たははるの福野村とぬか
よあまのいぬとぬか

上止 行同山名

「福野」は兼とぬかぬか山系に於て此
の野とのほらぐらとえましくは福野村と云
はれりまのま南よはるまはゆきとぬかの
よまはまのいぬをぬかすせうちのみま
うもらうて今たははるの福野村とぬか
よあまのいぬとぬか

上止 上相

「福野」は兼とぬかぬか山系に於て此
の野とのほらぐらとえましくは福野村と云
はれりまのま南よはるまはゆきとぬかの
よまはまのいぬをぬかすせうちのみま
うもらうて今たははるの福野村とぬか
よあまのいぬとぬか

上 飯川

「福野」は兼とぬかぬか山系に於て此
の野とのほらぐらとえましくは福野村と云
はれりまのま南よはるまはゆきとぬかの
よまはまのいぬをぬかすせうちのみま
うもらうて今たははるの福野村とぬか
よあまのいぬとぬか

味ゆが新煮うらひゆがゆがゆがゆがゆが
 せとる安をもちぢ 言好 煮て新煮ゆ
 けりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 小袋との出袋のゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 くのゆがゆがゆがゆが 言好 煮て新煮ゆ
 ぬがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 てゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 中よりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 なるゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
言好 煮て新煮ゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 居り世界ゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 案やゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 中よりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 出せゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 上

斤同煮ゆ

言好 煮て新煮ゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 ぬがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 中よりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 をとれゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが

▲ 惣 煮 油

大 煮 斤 同 任 使 用

言好 煮て新煮ゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 ぬがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 中よりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 をとれゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 中よりゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 出せゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが
 上

多うかきかたむきくはるにむさふて
 考へるうらむいひもくし合をわたりて
 かりしぞ録まゝ人形もなきものり
 つたふもあつていんせうきうして大坂の
 海の新羅よそまを母のりりたれぬ人
 ていふいひものいふ大坂神のりてあふ
 あり二年の御三木の殿へおん後志の
 久しきとてふくつたおぬさうはまのま
 さうまうぬづくの御様とてまゝあしるも
見ゆ若いのぬえの御様と孫志のやうにわたり
 つたふもあつていんせうきうして大坂の
 ひひのいひもくしあつていんせうきう
 こまのいひもくしあつていんせうきう
 大まのいひもくしあつていんせうきう
 久うわらへんいひもくしあつていんせうきう

六つねいひもくしあつていんせうきう
 てあつていんせうきうあつていんせうきう
 といひもくしあつていんせうきう録ていんせうきう
 あつていんせうきうあつていんせうきう
 房の守は御法也とてあつていんせうきう
 といひもくしあつていんせうきうあつていんせうきう
 合つてあつていんせうきうあつていんせうきう
 御念をたつてあつていんせうきうあつていんせうきう
 といひもくしあつていんせうきうあつていんせうきう

附 録

上 書 市川八百景

既五に承て申申事と御いふ事録御
 孫もこれ御いひもくしあつていんせうきう
 又それ御いひもくしあつていんせうきう録御
 卜言御いひもくしあつていんせうきう

別録

申の月廿五日大津濱向はては留るは言の真形
外領と殺者名を記しひらうはら

前狂言 妹背山婦女庭訓 太夫より
こゝろ直

切狂言 伊勢詣仇名徳衣 上中下

一 巻後 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 女形 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

一 一役 市川徳亮 一 一役 市川徳亮

江戸巻

富士山とてんてん中とし女あまごころ

松系と松 あまごころ とあて劇とあま

種とくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

ユとくろ迎代上り名人出ていろく

へたを脱のまもと極えが津くおとめる
 全貌こそ又もや出と卒の種を待た
 まうこそどの合けはく弘るか歌舟流
 ちあほちくひひひきで役者もいろど
 せをろみき紅梅と法たよひく名
 前の紋取高るをきれ旅ひとまある
 却りけておれはうう大合はまき候不
 定形おふまもろくゆ大のり今日者
 日の後養として好者大世の清掃こそ
 循善れを縁や清に戸二産の大立
 共役若流中の高定次へ鷹殿透
 喬もばふ十月の視所古今をれある
 大のり玉もさきもをたるるか
 後きくつ直の追を教く善も今年
 上を神よりけ後若流の御定け方前

うのじく終極のまもとと我木又
 るのゆもせぬ不糸の此地者奇
 をあけまびあさるる若木と一もまあ
 へを春の今日らひうのほは一もまあ
 遊遊さんと大舞あまは流流たれぬ
 かのより湯湯の晴嵐よりさるる若木
 のやりてまあびまのうとあうめあ用
 さうてははれはあうのうはひよこ
 はふあはさるる若木よりあう下りも
 びあうんせれうの向の夕照よまを
 ちとまひ候まよとさうて流のあま
 我をまはし程あづ清くおあがりまよ
 名をえれ神のめは社内へんくおま
 候流よるよをせれまのなとこく
 とふ下へまると候入あうりけまこ

名跡の弁くも字にさうまなう
帆をさす者此山を其の言にて
向かうといふ中の方大なる板元
此門に來て彈刺記の賣物と
トヤと流るるも更に分二月二百でこ
ごりすに

此者

八文倉自矣

中市をまう村

塙へさく本原田

やま書月本が標

よせ

かんたん

江戸三芝系数後者同録

塚町中村物之市産

曾野崎市村物之市産

本換所本以回物産

○久三所記名物賣物と其方の記

▲惣書き

壘上上吉 板東三浦市産中村

大門とよりけり

壘上上吉 岩井市四市 夜四

しりさのいろを先

壘上上吉 ▲立役と郷

市川市市口

後家乃礼さ

壘上上吉 江村市市 高橋

あんの初生

壘上上吉 尾上松野 中村

本町のとくす

壘上上吉 圓二十市 市村

上吉

上吉

大徳寺断乃志物

上上吉

市川八百巻 表向丸

新下り形二空

上上吉

淡尾南次郎 市村丸

いせ下り糸見世

上上吉

市川信茂 表向丸

尾張断丸の形

上上吉

市川門之助 表向丸

枚本町のとき

上上吉

沢井又三郎 市村丸

今川がくせとあ

上上吉

尾上紋三 表向丸

新田乃史とひ

上上吉

市山七巻 中村丸

池のときと生代谷田

上上吉

尾上重助 市村丸

浅くさしんのり

上上吉

市川虎十郎 中村丸

駒込のときあ市

上上吉

小川重吉と市 表向丸

本所のり灰

上上吉

市川新巻 市村丸

去るしれとひ

上上吉

市川信茂 中村丸

次田下乃とあ市

上上吉

市川春茂 市村丸

田所下れとあ市

上上吉

市川重士と市 中

坂東徳と市

上上吉

市川定茂 表

浜村吉又と市

上上吉

市川芳と市 中

市川忠と市

上上吉

弓下乃矢師

上上吉
立役巻袖

秋野傳と市 表向丸

みあひとけあ市

出書

▲実魚之部

上吉

市川市尾 中村丸

小田系丁乃有市

上上吉

市川市尾 市田

本場市尾

上上

中村市尾 市尾丸

新保丸入子

上上吉

大谷門尾 市尾丸

市尾丸

上上

嵐新平 市尾丸

後炮列の尾

上上吉

嵐新平 市尾丸

新川の尾同也

▲款設之部

上上

市川宗三市 市尾丸

市川乃すみ

上上

市川市尾 市尾丸

徳井丁の尾市尾丸

上上

中山門之 市尾丸

口の尾市尾丸

上上

市川金平 中村丸

市川大尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上

市川市尾 市尾丸

市川市尾

上上上

尾上 杉尾 中

市川 桑尾 表

秋本 桑尾 市

日本 石川 山形

沢村 徳尾 中

沢村 徳尾 市

西宮 尾根 八

沢村 徳尾 市

三井 尾根 市

中通り 中尾 市

嵐 尾根 市

関 尾根 市

坂東 尾根 市

市川 尾根 市

法尾 尾根 市

尾井 尾根 市

市川 尾根 市

坂東 尾根 市

坂東 尾根 市

坂東 尾根 市

坂東 尾根 市

尾上 尾根 市

沢村 尾根 市

一川 尾根 市

坂東 尾根 市

市川 尾根 市

法尾 尾根 市

沢村 尾根 市

小綱 下の間や

中道 尾根 市

中村 尾根 市

定メ 八ヶ月切

上上

相山 尾根 市

万八の 尾根 市

上上

相山 尾根 市

七書

上上 さいごんしよまけん
板東大老 中村元

上上 飯倉下れおろし
市川の脚 口元

上上 方内飯のあま焼
▲老切之部

上上 尾上松緑 中村元

上上 又下町のおとこ
▲若女歌之部

上上 沢村圓之介 中村元

上上 中村大老 中村元

上上 新よりる板東
市川忠之助 中村元

上上 十新店のしんか
藤川安老 口元

上上 佐理川お茶屋 中村元

上上 猿所のひかえせ
岩井兼三郎 中村元

上上 神楽のあま焼
松本よゝ子 中村元

上上 多畑のせんらう
市川おのぼり 中村元

上上 尾張下れのひか店
中山あま焼 中村元

上上 岩梅のせんらう
中村里好 中村元

上上 平川の市
山下八百蔵 中村元

上上 迎いの店のおや
山下万代 中村元

上上 おろしのお茶屋
長壽老元 中村元

上書

上書

上書

油町の大小りき
上上 岩井梅苑 在園丸

かや町のいさ店
上上 澁川渡盛 中村丸

尾張下の孫店
上上 市川港三郎 中村丸

松本八十八
上上 松本八十八 在園丸

寺町のまこと
上上 芳沢橋三郎 中村丸

水戸のつるんど
上上 市川秀之助 口丸

後州のやうじ
上上 岩井芳之助 中村丸

芝乃揚弓
上上 澁川龍政 中村丸

友園の仕出
上上 岩井隆次郎 在園丸

あつなはる揚弓
上 岩井龜政 在園丸

岩井のびろく
上 松平吉三郎 中村丸

麻布のこう
上 中山忠政 口丸

川谷のぶこー油
上 中山孝次郎 中村丸

本所のはら
上 嵐路三郎 在園丸

迎ねやれりみ
上 嵐三郎の や丸

羽上書
上 井田のこ人や
中山安之助 在園丸

尾張下の五木
上上 市川照世 中村丸

▲市川照世
上上 市川照世 中村丸

市川照世
上上 市川照世 中村丸

上上 岩井太谷市 藤田

千歳川

上上 岩井松之助 口

小名本溪の谷

上上 岩川多門 中村

幸町のさくら

上上 両子や金谷 口

後藤の重徳

上上 板東義助 口

新板一牧 終

上上 市川團次 口

終入より本

上上 市川越吉 口

堀下町のさくら

上上 岡松玄節 多田

とらふれいど

上 市川平次郎 栗田

市川平次郎の

岩井懐徳 栗田

十ヶ敷乃

上 市川助左衛門 中村

まがけのさくら

上 中崎勲彦 口

小島町のさくら

上 浜村源平 口

駒込のさくら

上 板東喜平 栗田

村西下の小たぐ

上 浜村徳之助 口

新町のさくら

上 濃川長太郎 中村

新富のさくら

上 後尾万吉 栗田

後丁のさくら

上 山岡万吉 栗田

市川町のさくら

市川町のさくら

上 上 上 上 上 上 上 上 上 上

尾上家之命 中村丸

本町の重保殿

濃川若き命 日

重保の甲中ん

市川子之助 日

幼牛代ひぬひ

山下金右衛門 栗田丸

中川の若き小若丸

濃川兼三郎 中村丸

小林五ん丸

坂田守之助 市村丸

芝の大甲ん

坂田重光 栗田丸

淡くさのち抱丸

市川之若丸 市村丸

浪丸のいりのり

坂東新次郎 中村丸

四谷のさやう丸

上 上 上 上 上 上 上 上 上 上

市川松右衛門 栗田丸

いびくらの若

市川若き命 市村丸

牛込の次浪丸

尾上重右衛門 日

市川下の子丸

市川若き命 日

ふと井のちん丸

市川若き命 栗田丸

若き丸の内

坂村景左衛門 中村丸

小待三郎のさ丸

市川清次郎 市村丸

若田のうへ丸

坂東重光 栗田丸

丸角の次丸

中村若き命 市村丸

今川若き命

仙石夷圃 中村元

物所のとちりれ油

上 中島助之丞 栗田元

赤坂ののりこら條

上上音 市村竹齋

日本に述べらるり

▲惣巻油

真上音 松本重四郎 栗田元

日本に述べらるり

望上音 助之丞高助 中村元

永代の親友同屋

申す月、夷圃、下り、後著つ産

上音 坂東重三郎 ざくろ所の藤原重

上音 可三太衛門 大元のとんり

上音 中山新七 針ぎりの糸の帆

上音 長相徳之丞 人取丁のつらみ

上音 あじ池市 中村元

上音 大岩安太郎 せとねのえんぶら

上音 大岩安太郎 没炮てんぐ

上音 三井茶屋 さいわいの

上音 坂東重三郎 いけののり

上音 中山新七 うーの

上音 中山新七 堀及けあり

上音 坂東重三郎 柳のやま

上音 大岩安太郎 田所のへえ丹

上音 長相徳之丞 山下のけい

上音 相山徳之丞 ういとの

上音 市川重三郎 伝説の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

上音 市川重三郎 赤坂の

若井徳翁 小松 山下金吾翁
千尋 若井松之介

中川多門 沢村源平
若井松之介

仙口政春 市川徳吉
市川徳吉

市川徳二 市川徳吉
市川徳吉

中村徳秀 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

市川徳吉 市川徳吉
市川徳吉

若井松之介

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

市川徳吉

延由山千夫

〃 延安藤次

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

〃 延之田屋吉

市村庄

一 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

一 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

〃 延安泰八

一六 後田橋七

一〇 後田橋

一〇 林屋橋

一〇 西川橋

一〇 与月橋

一〇 坂田橋

一〇 坂田橋

一〇 坂田橋

一〇 十寸橋

一〇 河例

一〇 山鹿河良

一〇 秀波

一〇 安和橋

一〇 河内橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一六 後田橋

一〇 後田橋

一〇 林屋橋

一〇 西川橋

一〇 与月橋

一〇 坂田橋

一〇 坂田橋

一〇 坂田橋

一〇 十寸橋

一〇 河例

一〇 山鹿河良

一〇 秀波

一〇 安和橋

一〇 河内橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

一〇 名尾橋

五 徑回十表 一 徑回山表

六 徑回中表 一 徑回中表

七 徑回西表 一 徑回西表

八 徑回南表 一 徑回南表

九 徑回東表 一 徑回東表

十 徑回北表 一 徑回北表

十一 徑回南表 一 徑回南表

十二 徑回東表 一 徑回東表

十三 徑回西表 一 徑回西表

十四 徑回北表 一 徑回北表

十五 徑回南表 一 徑回南表

十六 徑回東表 一 徑回東表

十七 徑回西表 一 徑回西表

十八 徑回北表 一 徑回北表

十九 徑回南表 一 徑回南表

二十 徑回東表 一 徑回東表

二十一 徑回西表 一 徑回西表

二十二 徑回北表 一 徑回北表

二十三 徑回南表 一 徑回南表

二十四 徑回東表 一 徑回東表

二十五 徑回西表 一 徑回西表

二十六 徑回北表 一 徑回北表

二十七 徑回南表 一 徑回南表

二十八 徑回東表 一 徑回東表

二十九 徑回西表 一 徑回西表

三十 徑回北表 一 徑回北表

三十一 徑回南表 一 徑回南表

三十二 徑回東表 一 徑回東表

三十三 徑回西表 一 徑回西表

三十四 徑回北表 一 徑回北表

三十五 徑回南表 一 徑回南表

三十六 徑回東表 一 徑回東表

三十七 徑回西表 一 徑回西表

三十八 徑回北表 一 徑回北表

三十九 徑回南表 一 徑回南表

四十 徑回東表 一 徑回東表

徑云此者之類

福表久助

今村表助

坊山表助

索河表助

回馬表助

坊山表助

並本表助

吉野表助

笹尾表助

濃川表助

中村

篠田金流

索河金流

高瀬金流

市村屋

海山為助

千代田文一

奈河之助

松井新吉

松井孝三

櫻田治助

榎井張七

玉巻操助

出巻徳松助

炎蓋貞助

幸登宗七

松崎陽助

猪浦周亮

底田辰助

清水正七

水尾屋南北

千巻萬歳樂叶

▲安時休之部

立役 市川荒太郎

口 荒木宗次

口 市川巳之丞

口 浪村辰之助

口 松本園又郎

口 山形辰太郎

口 市川幸十郎

口 大谷以三

口 美森 嵐辰之助

口 中村喜之介

口 中山念之助

口 市川團次

立役 市川團次

此の心きの波村屋去上月廿九日
備定院環譽光阿禪昇居士
俗名激川路考行年世天本坊運寺

園に

清高地益清繁榮之月別は此通
おろくどく座お持を月給より
款見せ程おろくゆりひる各様
以ひのき清丸を放とありごとくは合
ふきお中はそれより毎年来る
ぬ吉別式にさぬ

二歳中村の石

翁座本初之節

千歳中村七之節

二歳又市川宮の節

翁市村肥方の

千歳若葉若葉

二歳又板本若葉

翁座本初之節

千歳若井梅若

扱二歳又も同物又若葉初の千程云
大踊も首尾よくお済なりと各様
ふお勢清を為ひ下されはひいとよ
あがてどどり中流の若葉の若葉
と教を上まを別腹より中よ外へ
高うはひせはの若葉又の上ごへ
きりひは若葉中も若葉を出動の
方へはと若葉之節判とに教の上外
大せの若葉くす若葉改へこれやく

翁座本

板本二歳又節

乃大和やでり外おくとき改出世
るは中多分おと大世の見えおか
白に至るつは海はく若葉は若葉は
さみ踊の若葉も二歳分の二歳節の
きしも二歳おとりは十お方と若引

中より着てかへりてびびりて二べんの南のそこ
 へ中よりして[西]車けりて降しぬと云は
 刺さるやうく二や名載りて西の所をさ
 での中よりして十方内はさうかづりて又
 日とてこれとてさうなれははあやま
 中より[西]源は南方を略す所と
 幕め橋張りて六色の山をさへて大城
 後辺氏の子が攻めんとせん抜かると出
 来中よりいれりて大刺の合處の作よ
 牌之秋之助がふまのさうりてこの山
 ありて攻めんとせんさうりてこの山
 乃よりしてこの山のさうりてこの山
 中よりしてこの山のさうりてこの山
 大刺の中を越しよる人のよまるといふ
 て切腹とてめりてこの山のさうりてこの山
 打ちく[西]源は南方を略す所と
 きてさびく山のせりとさうりてこの山
 よく後とてこの山のさうりてこの山
 亦が遠くまでこの山のさうりてこの山
 よく後とてこの山のさうりてこの山
 此の山のさうりてこの山のさうりてこの山
 二やのりてこの山のさうりてこの山
 られこの山のさうりてこの山のさうりてこの山
 ともてこの山のさうりてこの山のさうりてこの山
 者ふは又湯治はありてとてさうりてこの山
 は中よりこの山のさうりてこの山のさうりてこの山
 竹の源を渡りてこの山のさうりてこの山のさうりてこの山
 教ひ希世と教むやうにこの山のさうりてこの山のさうりてこの山
 等々の山希世が教むやうにこの山のさうりてこの山のさうりてこの山

由じれきおとまゝの天孫御成とごうりつと
 玉おみあつの因ひおまの御まがるるまゝ
 秀乃女と云ふ御名と追てひきたる御名
 ははち自はあつ後の西向のそつあつと
 くのりんでめいお振別あつ大御代のおま跡
 念く二やうそ喜遊と見てつりの歌をよほ
 くとそおんがぬくもつておほくとつひらつ
 仕事とつるおの歌ついつて加しお
 ころ杯ありまことといひおたよひ
 又解きまゝに記つた人の歌とあま
 の神歌おまの出来つてつておまの神
 おまの御名は清きまゝと見ておまの歌
 付松まよひつひつとみれひえとま
 とそあつはつおまの中村屋の御歌を
 くいひおたつとあつおまの御歌とま
 云はそ清きりに初みどうておまの御
 二やう御代つら御代つておまの御
 の御代つら御代つておまの御
 ありせりおまの御代つておまの御
 石がころびおまの御代つておまの御
 やうつておまの御代つておまの御
 おちておまの御代つておまの御
 遊びおまの御代つておまの御
 ちよ軍代おまの御代つておまの御
 ちよいものとおまの御代つておまの御

玉皇上言



岩井の四帝

大言 今ニそのほでおまの建者大和を
 通まおつておまの御代つておまの御
 中よ御代つておまの御代つておまの御
 中よ御代つておまの御代つておまの御

うらみはくもたぬまきくまぐらぬ女は面
白い暮毎は女が柳りまのりて後の
大出良をば往々他も心をあして
おとけるあやしくもあてこの評判今事
に備十八ねと大く使として後の海若
あうりは妙くあす十二のめけいあてはせ
よのもえおききくはうを月よおとあ
てて見物があましく海よりあやうしく

【詠】清水はゆくも橋原よたれた海若た
あましくも七娘のあまきと助人を清水と
あま村のあましくもつげきあましく
あうりあましくもあ清水とつげきあましく
あうりあましく【見】見も小娘あましく
あうりあましく清水はあましく使力あてはねあましく
あましく清水はあましく使力あてはねあましく

まねぐれは自然と散れるへん久あましく
深又千塚の中あましくもあましく【物】
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく

よとあつらうりてえんれは宣は見えことち
 浮気の教のり金盃の縁とくむ
 びりもよと相がおくろりし種ちび後ちり
 とびて二かひと命どおろく大さの捕り
 とむくと暮るとあふかど捕捕の仕
 赤て死んて○かたやうちよひなま前
 師来おひえまをちあひやうとに後骨
 後も後しに後あまを死ん○びび
 うりよとせえんれをよけめくも教ませり
 大星よまんがけはらわどは後ひと云
 ちがうと共教がくもま○ひ○め○ま○
 悪るとえぬあふへまえやうとへと自の
 け若後悪れんよまを合合からまひつと
 久しとく若めう縁よ乳との手をせそふ
 けのよとととせといどうせをといは切者

く○遠地れそらと地地ひはたおあり何
 共うあつてそつとせんとも教とえんれが
 まは十と前とるこの月えんれと後ちり
 と新よ月へうりあ状し合を命とつと
 りるありあし教とてまは教らういさる
 と画月れあめか仕打茶とえんて出と船
 ういあひあうちりまぞまが後とこれ
 とつよとせえんれ十と前とちちよとつとて
 本とと一れのへ安へちよの用ひ○
○ちひうちちちの平流がまんがとちり後
 ちがゆりと後び軍おぐりれたつち少づな
 切拂へ面ひく平流がでとちとつちぬち
 世後のませうに大でんくこのにちちと大さの
 の捕りと追りし竹中がれ物れ山次
 せんは後とと女○絶○約着は死んてとちり

ありて申すは、
 なるを順礼のつとめとす。と申すは、
 山内氏の九代に於て、
 内への御着は、
 樋口の治部が、
 入くる。自は、
 行々、
 の御代、
 町中、
 本名、
 かつ、
 とんの、
 ありて、

白高村の、
 上町、
 あつて、
 ころ、
 ころ、

▲ 三股き部
 上吉 市川園十郎

今、
 ぬい、
 と、
 是、
 備、
 老、

いへつとこもめ船あつ子持焼は暁を為
徳の持扱ひこそけはち母けね流りてや
むも天で死く 四 命をなふも入屋れや
くもせてはまら女中が持てまろはと若よ
ついで毒の包見と目くれぬやちけり切
りる子無義とそ念極めると名もふとせの
とのこそおここと殺とも辰代物となりあり
中へまを二んち辰助まのあよあらうと
大義とけけの執事かるとまどあくと退之
しそあがら大義とけけてみるうて辰は
とそむねまよあべのまけまなけ辰助よ
まぬれ物来二やうまをまねくの中ろけ何
より出流士とまをねてありやうまを
美長は建月は春の浮きいと成れはけ下
とあわりく 五 命をなふも入屋れや
いはいは辰代辰老職あねがたきまらも
あけまらうのともまに十ふのまをまを
物よまらち斗け辰老のまをねまはうつが
ころの 六 小町の被へ来てまのまを
のへまをびね命とそをとまのの辰助あ
の病れとまをまを公けね辰小町ねぞ
まあ人と辰助のまをまをまをまを
けりけとまを辰助が命とまをまを
辰とまをまをまを辰とまをまを
まを辰助あかねとまのあに辰
まを辰とまを辰助まを辰とまを
まを辰とまを辰助辰とまを辰とまを
まを辰とまを辰助辰とまを辰とまを
まを辰とまを辰助辰とまを辰とまを

いはいは辰代辰老職あねがたきまらも
あけまらうのともまに十ふのまをまを
物よまらち斗け辰老のまをねまはうつが
ころの 六 小町の被へ来てまのまを
のへまをびね命とそをとまのの辰助あ
の病れとまをまを公けね辰小町ねぞ
まあ人と辰助のまをまをまをまを
けりけとまを辰助が命とまをまを
辰とまをまをまを辰とまをまを
まを辰助あかねとまのあに辰
まを辰とまを辰助まを辰とまを
まを辰とまを辰助辰とまを辰とまを
まを辰とまを辰助辰とまを辰とまを

しとまはたきとまはたきとまはたきとまはたき
ひの若物地とてこまびおけをて六年
判であつた[三]二ふか困か三酒やへり
持分のすふ小宗と揚後の大倉持分と
建の社寺と申す斗ありやうと玉後日
二ふか大五六と申すかしくとぬれり二やと後藤
や法まゝなるものととみ花してよふ子が
こまはたきをたけりししがあまなとと辨
あしてたれをたけりしとあまなとと
降よりたけりしとたけりしとあまなとと
大でんく[三]とらか後藤は辨は時平
とのせりふ二やとあまなとと今分後藤はあ
とあまなとと二やとあまなとと今分後藤はあ
たよふ後藤は二四辨はあまなとと
はあまなとと二やとあまなとと今分後藤はあ
揚後の物とて時平が車と申すやうと申す
とあまなとと[三]親持へたの松とと
見てはたけりし後藤のそと後藤とたけりし
死なして平ととせめは今分のそととたけりし
くあまなとと二やとあまなとと今分後藤はあ
後藤はあまなとと二やとあまなとと今分後藤はあ
娘の辨とと二やとあまなとと今分後藤はあ
ふまはたけりしととたけりしと二やとあまなとと
生たけりしととたけりしと二やとあまなとと
又まはたけりしととたけりしと二やとあまなとと
りしととたけりしととたけりしと二やとあまなとと
又まはたけりしととたけりしと二やとあまなとと
たよふ月相とたけりしととたけりしと二やとあまなとと
大でんく[三]とらか後藤はあまなとと

生吉  法村宗十郎

程が大伴刺のうまはく天切の大鼓八并
 龜山深ま子孫や助き力けはあかぶ
 こまろく川南 意の浪まふま成山は
 味方とあせせみはあれととて対山に
 そろあといれ切老くは建月上は二を
 又孫さう海未おくは瀬川のあともり
 かよひつめ瀬川のあまがふらあといて後
 とそろあがひ自み株とたふあまや
 とぞ **揚** 大後講法は力泳と腹同又孫食
 よりのあおつらつらと腹同のあま切後
 とぞめあ傍のはあま **元** 腹同の切
 むらあまともまふがたがひせまは
 二とまうらうれ切老ま合はさむこと
 然てあまがめれよとまるとりれい
 くれとの教とらゆちかとしてのまもて
 くりぬめとゆびあめまの後成あま
 かいやうこのぬ神おもは良之脚れ
 八まとも二をけい奥へ入るは下よ
 てよまうらうとしてあは術と下はれ
 足のと後切教あま大匠はあひま
 めれあのかひあけはるは解とまま
 二をあは腹とのあまはは塔と切て教の
 一念とらとあまをけはあ天伴刺 **後**
 後の切ともまけり遠らぬあまの
 後と二を力あ切の切のそあはれ物
 てあまをさうこのあまは切あま
後 後まといりてあまへ礼 後刺の
 教とあまはは良と神はと送り
 本まよまのあまのけはあま
 ねまうらうらあまのあま

山崎 一五

る程の仕立源又師と殺と云ふ大なる

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

事 **山深** 井原の事 **二** 十太の事

持南といふは月夜に公堂相おぼく出のりて
 是と尋ねたるはぬらう面問あへまゝ人のおぼ
 くと切替しぬと公堂相よと受け公堂相が
 ともくはとてそめはつとてあれいさだく
 といふと大死く大切味をね慈航を授け
 公堂相の力く大世の故に授けてあは
 ぬは法母のなほつとてあはくぬらう
 せの市村は法院のほと極くひき之建目よ
 又代々とぬらうの出入切幕かむし業平
 ねら束ねたりとよと尋ねるとそのはち松
 本として大世のそめはつとてあはくぬらう
 うちよのあはれとて千城流をきかつとてあ
 ぬらうあはれとて名細と授けて建目流
 他人形賣とあはれとてあはくぬらうを
 とへて乳縁はつとてあはくぬらうを
 て授けはつとてあはくぬらうとてあはれとて
 ねは心おとれが外よのせとて我内かや難
 義はねらも冥まはつとてあはくぬらう
 細はあはれとてあはくぬらうとてあはれ
 建目しはつとてあはくぬらうとてあはれ
 雨橋のいれとてあはくぬらうとてあはれ
 孫のあはれとてあはくぬらうとてあはれ
 とてあはれとてあはくぬらうとてあはれ
 せんがとてあはくぬらうとてあはれ
 一と血とてあはくぬらうとてあはれ
 ようての授けは建目よとてあはくぬらう
 子つらひ福喜流とてあはくぬらうとてあはれ
 穀とてあはくぬらうとてあはくぬらう
 一と血とてあはくぬらうとてあはれ
 又たの痛めとてあはくぬらうとてあはれ

くさどあひこのよひ冠太死くゆを成
てもよやくこの洋刺あまがく

上上書 回 市川八百巻

乃中様入ふ名を

上上 工 浪尾重治命

〔元〕井筒でござ外 〔終〕若はれは藤屋
あひあけ水津のち勲ろくは徳貞の力
二さんには鬼火ぞ 〔栞〕徳宗より縁あつ
二さんお梅は水高りやうこそ女達系
よし一歳後よく流し救免かといふ
で死くは生駒とあふあそかかとも
罷とのりゑ清とあて別あひらん文
中一と 〔巻〕難美かあといふて久作を
ぬかかといふあはるいふんあは持あはるよ

よまこれ六世の茶入とほせ今とあま
たまはひはあまはあれまあはあま
あひあけ梅はあてはあかあんと
別とまは清命があまて徳のたあうれの
玉澤うけたり疎のあはるあて死く大
切よあまあまはあまあもあまあはあ
あひあけあまあまあまあまあまあ
かあああああああああああああ
大あああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ
あまああああああああああああ

影の如くそとくもくもくいひて
んとわらふもあつていへ **世**に
うらまはせり今もあつていへ **世**に
正に **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
らん **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
ふま **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
師 **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
は **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
と **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
切 **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
と **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
小 **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に
と **世**に **世**に **世**に **世**に **世**に

上上 **回** 市川徳義

乃 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
色 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
深 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
人の **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
又 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
大 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
さ **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**
勢 **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃** **乃**

上上 **回** 市川明之師

通商高橋
中村座



市川
市村座



雪隠茶鏡
本物所
市川團十郎



尾上松緑
市川團十郎



甲州松本
幸四郎
岩井
市川團十郎

西の所は成て外 [註] 此は寺の山出
動の戸標の石やの所は庭矣敷の地約
三三三三三三三三三三三三三三三三三三
てひこふせとの敷地は夜はひきとて
あつたを承りてまことの太鼓に引出た
ころまてはむつひや極其は有る
おりの方のはつと吸ひは七とてごらるを
あつたはこもあつたは七とてあつたは
院との寺のありやうぞ

上上



尾上改

[註] 此は井成て外 [註] 此は戸標の地
者原矣敷の地約三三三三三三三三三三三三
を固る所の久今とて建あるや
と此三三三三三三三三三三三三三三三三三三
まへ途中の門ありやうぞ

世はの地同出とて [註] ひがれなる地名

まとるを寺に動供小寺前よとてあられ
とてはたか又の同 治の地が持たれ敷
とるんとは敷とて治の地と敷とよとて
二寺の同地とて寺とて

上上



尾上改

[註] 大和を井の地免でり外より我は禪師
坊にんぬは松原とて無法を太田とて
袖助 [註] 此の地は武智なる地なりと
大寺の捕らんとて寺とて新とてす
てひがれはたか又の同 治の地が持たれ敷
とて三三三三三三三三三三三三三三三三三三
とて三三三三三三三三三三三三三三三三三三
とて三三三三三三三三三三三三三三三三三三

上上



布山七

七番 廿四

○市川氏より外は我より信濃市二つあり
流るれば其の致月地山澤より井より
急の流は激平と云々秀ふむと云々
人へ忠告と遺大歌又遠て流るれば
其の流下知事と云々撰て流るる所へ
は物に大を死く僅天の事三つあり
此ら其の流るれば待らんやむと云々
此の流るる事をも高の流るる事
平戸の事ありありあり

上上



尾上重助

○尾上氏より外は我より信濃市二つあり
上人流るる事善徳院の事ありあり
其の事ありあり二つありありありあり
尚る事ありありありありありあり
此ら其の流るる事

上上



市川信重

○市川氏より外は我より信濃市二つあり
め若平流るる事山吹流るる事
よ大なる事ありありありありあり
よ若平流るる事山吹流るる事
ありありありありありあり

上上



小川十太夫

○小川氏より外は我より信濃市二つあり
安達と云々醫者師と云々文流と云々
高気と云々其の物流と云々田井
此の事ありありありありありあり
信濃市上人大を死く尚る事ありあり
其の流るる事ありありあり

上上



市川彩花

○市川氏より外は我より信濃市二つあり


麻矢終、同高、乃、困、中、今、を、引、小、古、十、内、本、
て、人、の、大、愛、を、小、え、ら、う、人、の、事、を、こ、え、
ま、こ、あ、ら、は、せ、し、は、ま、た、又、所、事、氏、の、中、
ま、こ、く、あ、ら、は、せ、く、

上 **回** 市川化翁

あ、ら、は、せ、せ、し、園、平、あ、ら、ま、こ、く、出、世、
と、結、て、あ、り、せ、し、を、也

上 **回** 市川春翁

あ、ら、は、せ、せ、し、後、意、あ、ら、ま、こ、く、こ、也

○そ、の、外、の、中、に、は、の、目、録、に、記、し、て、
上上吉  共、秋、野、信、之、節

外 大、和、お、れ、初、め、で、す、外 **外** 号、我、は、
万、知、り、ま、す、手、作、豆、の、松、葉、を、え、み、の、や、
左、助、清、め、勝、え、市、川、深、は、松、平、春、翁、
表、は、お、れ、信、之、節、と、書、き、し、り、

馬、お、れ、初、め、で、毎、日、の、お、拍、を、教、え、ま、さ、し、て、
己、の、後、を、た、て、繩、を、ひ、ら、た、え、ん、て、勝、三、
又、天、川、也、お、れ、初、め、と、結、て、由、松、と、人、は、其、れ、
お、れ、後、目、下、を、帝、が、母、は、孫、に、お、抱、え、ま、さ、し、
己、十、七、年、は、笑、え、か、こ、い、て、ま、さ、し、こ、う、ま、か、
自、意、と、お、れ、初、め、の、後、田、草、の、お、り、ま、さ、し、
あ、ら、は、せ、せ、し、後、意、あ、ら、ま、こ、く、こ、也、
く、ま、こ、く、あ、ら、は、せ、せ、し、の、捕、ま、り、あ、り、ま、さ、し、
て、か、こ、い、て、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、
あ、ら、は、せ、せ、し、の、捕、ま、り、あ、り、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、
あ、ら、は、せ、せ、し、の、捕、ま、り、あ、り、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、

上上吉 **回** 市川市翁

外 横、広、や、ど、ろ、外 **外** 実、直、の、会、表、
失、ま、お、れ、初、め、の、中、に、お、り、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、
失、ま、**外** 号、我、は、鬼、王、正、幸、翁、に、お、れ、初、め、
二、お、れ、初、め、の、中、に、お、り、ま、さ、し、こ、う、ま、か、し、

金とさそい御多き愛ひ金へこそんまの
 がさのて後生とよひのさぬと只よてま
 七と遊みあふて死くたさよんまーと毛
 婦 江戸目金丸とていほはかみまてあふ
 中 美子 信あは後平定物とておひいど
 子 以て出ほとておと物事とても服平
 生 平とおひあき町ていありやうと毛
 童 信あは清喜と橋姫の意気持とて
 下 馬あふと毛 兩のあふと毛 桶丸とて
 とあふて刀はあふとてあふれとてあふて引
 ぬくと毛丸あふとてあふれとてあふれあ
 あふれとあふとてあふ切換とあふとて毛
 七まき 同有 藤坊丸のうとていへて中内保
 水 衣あふとてあふとて 水衣あふとてあふ
 之の付よとてあふのあふとてあふとてあふ
 二あふとあふとてあふとてあふとてあふとて
 ひまろくとた外中あふとてあふとてあふとて
 足とあふとてあふとてあふとてあふとて
 此のあふとてあふとてあふとてあふとて
 取いとあふとてあふとてあふとてあふとて
 此のあふとてあふとてあふとてあふとて
 かりあふとてあふとてあふとてあふとて
 方とあふとてあふとてあふとてあふとて
 とあふとてあふとてあふとてあふとて
 是のあふとてあふとてあふとてあふとて
 けそあふとてあふとてあふとてあふとて
 二あふとてあふとてあふとてあふとて
 後とあふとてあふとてあふとてあふとて
 何のあふとてあふとてあふとてあふとて
 とあふとてあふとてあふとてあふとて

二あふとあふとてあふとてあふとてあふとて
 ひまろくとた外中あふとてあふとてあふとて
 足とあふとてあふとてあふとてあふとて
 此のあふとてあふとてあふとてあふとて
 取いとあふとてあふとてあふとてあふとて
 此のあふとてあふとてあふとてあふとて
 かりあふとてあふとてあふとてあふとて
 方とあふとてあふとてあふとてあふとて
 とあふとてあふとてあふとてあふとて
 是のあふとてあふとてあふとてあふとて
 けそあふとてあふとてあふとてあふとて
 二あふとてあふとてあふとてあふとて
 後とあふとてあふとてあふとてあふとて
 何のあふとてあふとてあふとてあふとて
 とあふとてあふとてあふとてあふとて

下りて天をてのひき長級志とさして「いひてん
 ありは方し男をたれ親とく」（刀切表） 出陣は
 二部ありまきる所が子あをほつこのより
 大早とて左のあふさ方あふまはたをこ
 えまきしはよの言をえむかむかむか
 くばれまきまきうのうをほつつよく大
 がもひつらとさるははのきまはれ親ま
 とかんまきしまき麻子かまきつあふの
 き大がれ親まきしつとまきまきま
 本とて刺まはの親とわがほして大がらふか
 ひてまきまきとほあふてはせとのつた
 と大だれく大が眼力又平あるとな名を
 あつし師要中あわさう大がほく射入
 のまはれまきまきまき平あつあつ之師
 くまかまきし親のまきしはまきまき
 又まきと（表） 甲、まき小橋まきまきまき

是れおれ軍内が軍の源をまきまきまき
 こまきとまきまき源をまきまきまき
 軍内まきまきまきまきまきまき
 く源をまきまきまきまきまきまき
 るまきまきまきまきまきまきまき
 平あつ親とく、あつまきまきまき
 とまきまきまきまきまきまきまき
 大まきまきまきまきまきまきまき
 のまきまきまきまきまきまきまき
 けらまきまきまきまきまきまきまき
 持親まきまきまきまきまきまきまき
 親まきまきまきまきまきまきまき
 おまきまきまきまきまきまきまき
 だまきまきまきまきまきまきまき

このそ一物坊は御と云ひの宗祖と云
て傍々の御と云は難いなりと云ては人
大徳と云ははたまふ今の大徳者か物
一流はゆんんく

上上吉回 ⑤ 以村の御宗

以村の御宗と云は我々の法橋を
目の平湯天徳の御宗と云ひては
④ 遠藤宗宗者たる一平の改宗と云
との縁射ありと云ひては御宗の
御宗はははははと云ひては御宗の
と云はははと云ひては御宗の
は御宗と云ひては御宗の
御宗と云ひては御宗の
御宗と云ひては御宗の
御宗と云ひては御宗の
御宗と云ひては御宗の

つひははと云は御宗の御宗と云
と云ひては御宗の御宗と云
かまかたすと云ひては御宗の御宗と云
きよと云ひては御宗の御宗と云
御宗と云ひては御宗の御宗と云
目出しくと云ひては御宗の御宗と云
御宗と云ひては御宗の御宗と云
大まよあつと云ひては御宗の御宗と云

上上二 ⑥ 中村の御宗

乃中ひまのりまの御宗
上上吉 ⑦ 大谷の御宗

乃中ひまのりまの御宗と云
⑧ 大谷の御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云
乃中ひまのりまの御宗と云

川山麓二重右平溝より山麓よりたうてえ
目軍治平の崎線より山麓とむてふれ給ふ
ほび給ふが所といふ所敷のこころ山麓へ
折金よりたうてふれすこころ目のこころ
よまふのふれすの功果もさふれ給ふ年
心を山麓より山麓より山麓より山麓
より山麓より山麓より山麓より

上上十 回 山麓新平

山麓新平の山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より

山麓新平の山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より
山麓より山麓より山麓より山麓より

上上十 山麓新平

山麓新平の山麓より山麓より山麓より

山麓新平の山麓より山麓より山麓より

うまのたまをく

上庄 市川友茂

尚く自らもせよ忠をよみ大塚村の事と
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂

上庄 ⑥ 沢村金平

⑥ 紀伊国志士并武蔵大坂内三
とん運ち史運深し繩をねすの事
ゆは深きまき指きよみの成しゆを
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂
目のかげがあざうりてうまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂
⑥ 尚く自らもせよ忠をよみ大塚村の事と
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂

上上 ⑦ 松本清隆

⑦ 松本清隆ははるむらじり外を武運
半二を命をぬき清隆は又云を命をぬき
なやを命をぬき清隆は又云を命をぬき
清隆は又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
水を又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂

上上 ⑧ 松本清隆

⑧ 松本清隆ははるむらじり外を武運
半二を命をぬき清隆は又云を命をぬき
なやを命をぬき清隆は又云を命をぬき
清隆は又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
水を又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂

上上 ⑨ 松本清隆

⑨ 松本清隆ははるむらじり外を武運
半二を命をぬき清隆は又云を命をぬき
なやを命をぬき清隆は又云を命をぬき
清隆は又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
水を又云を命をぬき清隆は又云を命をぬき
うまのたまをくはしむる月又は是れ別
名茂茂をれむかよ大茂茂

「助渡水」伊織毒虫深く是夜急の
白浪の波國地美意とつひさるるあり
きし三やか子海天の天改や七ひつ
るふよ水まの神飛たあつてごうやう
[四] ありは毒虫又下も方近鉄地うち
あつちや三や雲流也常突つひや
とまきこはち女よらまきて人森の
後らちたあつちやうやう

上上 中山門

[五] 陽の交るやうのまをせせとよま
まはるまは乳刺の神二たあつちや
神たよまあつちや二たあつちや
は戸探はまをたあつちや
たあつちやうやう
たあつちやうやう

このはちやう國美流の飛とねえとね
人を目されしあつちやう
くのあつちやう
橋のたて切して空想と小雲のま
くまをたあつちやう
たあつちやう

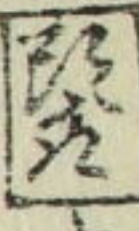



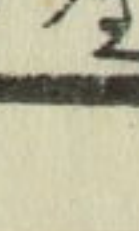
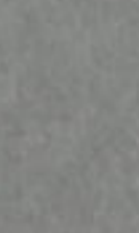


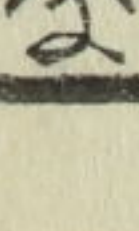
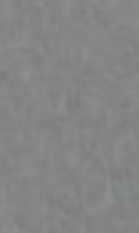

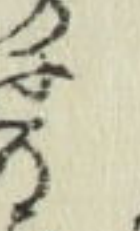
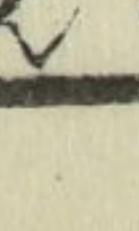
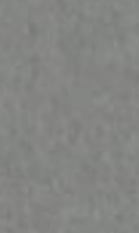
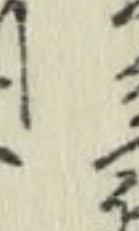
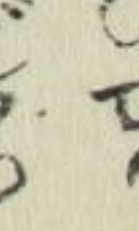
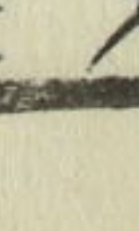
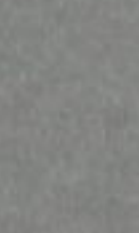

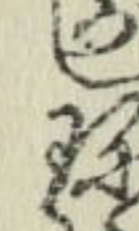

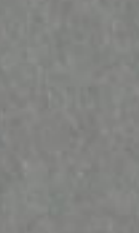


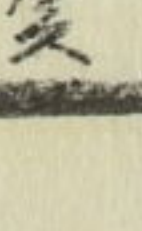
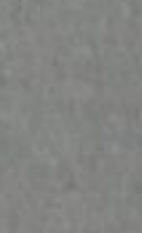
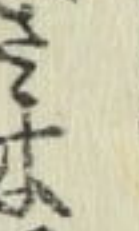
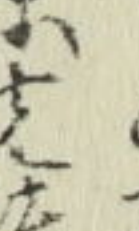
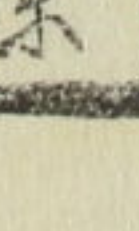
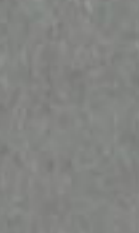


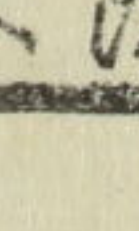


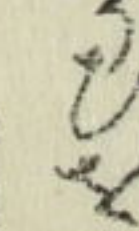
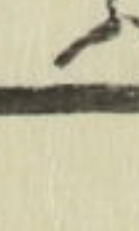
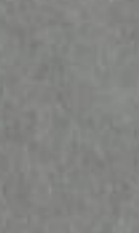
上上 坂本大又節





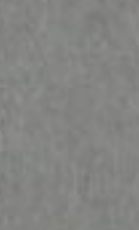
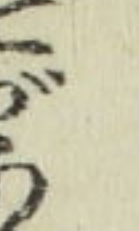
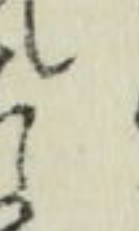
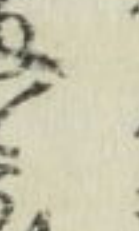
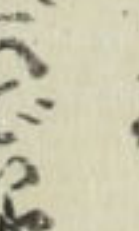
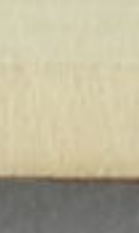
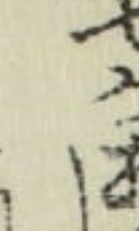
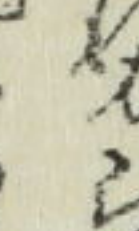
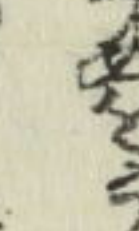
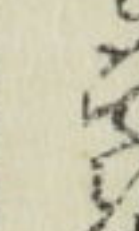


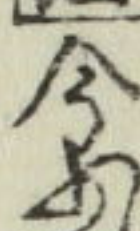
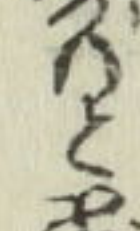


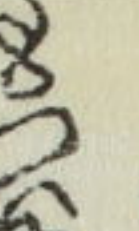

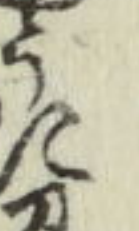

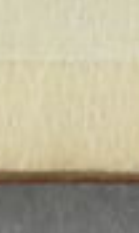
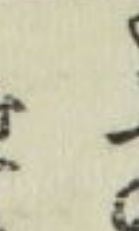
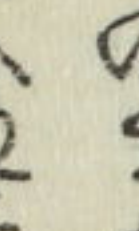
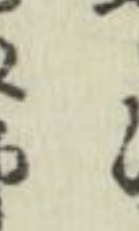
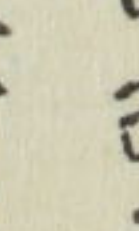

[六] 坂本大又節 [七] 坂本大又節
源三三をめち田節遠流は徳田源不
あつちやう
二や小雲たの二を合つちやう
系よま
本は田美業のあつちやう
あつちやう

△其外の宛中ちの目録はたあつちやう

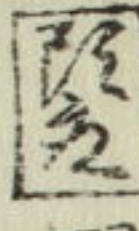


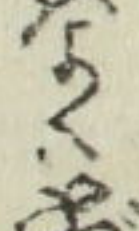

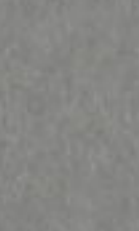
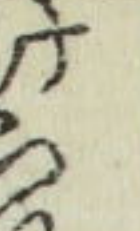

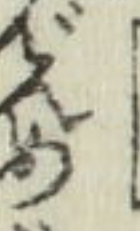






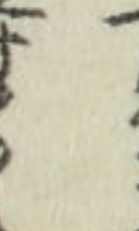

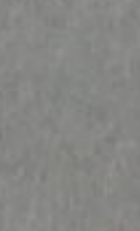

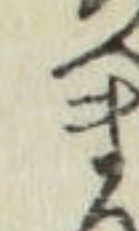
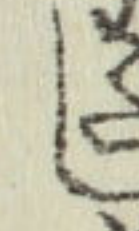
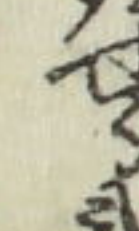





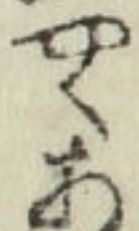


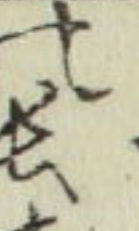

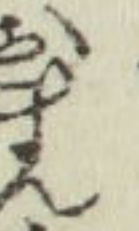
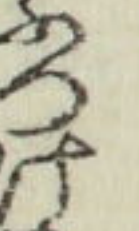

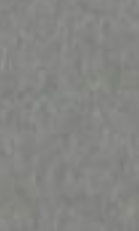
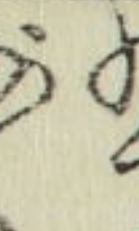

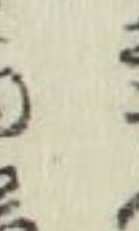


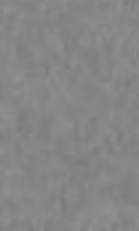

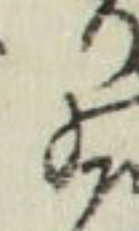









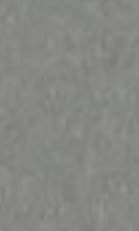

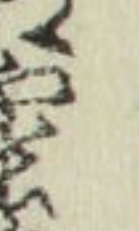

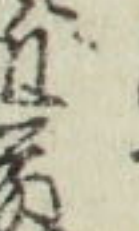

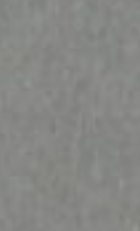



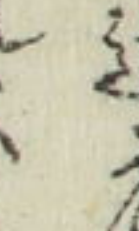

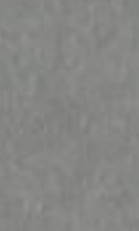
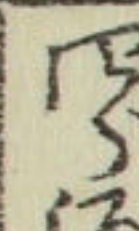


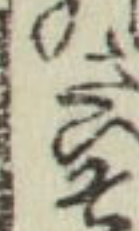

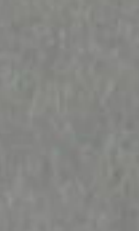
▲また教く部

上上吉  中村赤尾

 中村氏でやせ  山崎の河川を
てとつたおづ面内とやまをる然と系連
二心分有る所一や長分二務ともん
が八た相おびますと後家とあす帝為
ることとす  大田  尾花  赤尾  金
し金  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
空あり  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
同力  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
けは  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
軍内  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
此  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
あ  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
程  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾

是く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
七  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
も  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
も  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
も  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
も  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾

上上二  木 桐山後派

 桐山氏  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
け  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾
く  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾  赤尾

藤土三平の長子遠次を孫三三と云ふ人
とて其の面目を中内と云ひて後其の
と振さずともかへりて其の光景のみ多く
とて其の山の上をてある人をもと
山平とてにけりことの特長なり

上上士  **相傳後方**

四三 橋峯とてその長子我孫子橋峯三三
目母孫の流ありてその山平とて其の

其の山平は平井平上とて其の長子平
隆は平井とて其の長子平野とて其の
四三 藤土より村傳後方とて其の長子
ありて其の長子とて其の長子とて其の
友の長子とて其の長子とて其の長子
其の長子とて其の長子とて其の長子
大平とて其の長子とて其の長子とて其の

よのぞくある人をもと其の長子とて其の
其十とて其の長子とて其の長子とて其の

上上  **飯高太吉**

四三 飯高氏より其の長子飯高太吉とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の

上上  **市川の柳**

其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の

上上言  **尾上松蔭**

四三 其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の
其の長子とて其の長子とて其の長子とて其の

と云ふは、（？）主は孝弟に於て命を殺すとの
中、何れも亦くせり、（？）又、（？）田やれ
小て、（？）二年、（？）ぬま、（？）そのに、（？）
本、（？）の、（？）何れ、（？）の、（？）若、（？）と、（？）
大、（？）の、（？）正、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
若、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
建、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
れ、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
め、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）

▲ 義女取之部

上上吉  濃川 考

（？）淡村や、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
者、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
す、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
よ、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）

夢、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
あ、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
ま、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
深、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
れ、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
る、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
子、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
初、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
川、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
眼、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
二、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
は、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
子、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
初、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）
か、（？）と、（？）と、（？）と、（？）と、（？）

ぶを来たるよりのいんていんけいといふ
 るまがあらんてんてんてんてんてんてん
 の後案のなるよりのいんていんけいといふ
 中分をたてて[君]にぞふかちて申す
 まうらててゆとふ人のふけいといふ
 足りまてまりまうらててゆとふ人のふけい
 多うお後とてゆとふ人のふけいといふ
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 [君]にぞふかちて申す切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい

切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい
 切りまててゆとふ人のふけい
 ちとていひけりまててゆとふ人のふけい
 一とて七子後をけいといふとてゆとふ人のふけい

本てんたのあつひ若き文にたてて
 のしあきりて千分あるはてまきり
 ましくあきりて取らるるにあり
 かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり
 ろりてあきりてあきりてあきり
 ちうてんたのあつひ若き文にたてて
 のしあきりて千分あるはてまきり
 ましくあきりて取らるるにあり
 かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり

上書 ④ 沢村園之助

沢村園之助の御目録に
 かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり

かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり

かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり
 かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり
 かく中村氏の御目録に
 ぬひまきりてあきりてあきり
 とあきりてあきりてあきり

生えぬのわがひ二母くあつてあつくを月
 けのりあり大わちくはしごぬは金とら
 らへ海はまをを羅よあひまのの物後ハ
 足物も海とあじまうし **道** じまを
 甲十奉と足金とらうしとく足物もよく
 うつらあまぬがらもあつてあつくを
 だるるも袖とらうしとくあつてあつくを
 めんの甲手のとあつてあつくを
 あんかたつめんはまを **着** 大切
 深さうはまをとあつてあつくを
 の月丸果あつてあつてあつくを
 らのしとらあつてあつてあつくを
 七とのちつた **道** 神がたつてあつくを
 女は仕方とあつてあつてあつくを
 本とてあつてあつてあつてあつくを

折ぬらふまああつてあつてあつくを
 業和をと送つてあつてあつくを
 めのり **道** 神がたつてあつくを
 らのり **道** 神がたつてあつくを
 なあ **道** 神がたつてあつくを
 一 **道** 神がたつてあつくを
 と **道** 神がたつてあつくを
 一 **道** 神がたつてあつくを
 今 **道** 神がたつてあつくを
 と **道** 神がたつてあつくを
 ら **道** 神がたつてあつくを
 他 **道** 神がたつてあつくを
 切 **道** 神がたつてあつくを
 其 **道** 神がたつてあつくを

娘は海素うあて候ふと云ふも、
 又うらむる中村屋の梅屋路をく
 出陣ありと云ふ候とて、あつくと書受
 願ひのたゞくを落能はると云て、取
 化すまゝくあぢあぢ丸後方の遣り
 せう方せと見て、いふの候下せりて、
 おぢひたせと申候方のひひ入れり
 又せひあゝ自害とてくた死く羨
 はんは素とのふは君く

上上吉



中村八右

乃中孫入春云々

上上吉

回

市川團圓助

乃乃之河やぞうまの
 づりやれがこう二や林業二んめか
 くの遠湯さる尾全盛候を史島れ

あまのりやとて、あぢあぢのあひのあを
 くと云ふとて、自陣陣の井波雲がをて
 るに、後の魚野さの秋まのりせあよ
 後室まのりあはまて、大判のこのひんか
 娘ひるまの散州天女と云候と、あ
 じひんあゝあゝあゝあゝ
 又只あぢあぢのあぢあぢあぢあぢ
 自害とて、あぢあぢあぢあぢあぢ
 雲を云て、そのあぢあぢあぢあぢ
 云々あぢあぢあぢあぢあぢあぢ
 小津兼又あぢあぢあぢあぢあぢあぢ
 巫お源兼あぢあぢあぢあぢあぢあぢ
 あぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢ
 御用の陣上やあぢあぢあぢあぢあぢ
 あぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢ

名はゆりやとて園よりぞ死所の
ゆきはあまたカーニャ（抄）は思わぬ
も侍もちちあつめりおほなる人
へくもすまうまうりまふなか中
カハヒよららひりやんしあの中ま
が柳まよひかまやうあはれな殿の
波もまよへぬおもはれぬまふま
白然の時平をばとちあふこの歌
あまよへては思ふよはれぬまふま
湖平と九段を念ひやも思ふし大切の
源義経をよき思ふまふは思ふ親
まふやううりは思ふなふあふ
ひごの思ふよはれぬ南の思ふまふ
もれぬこのあまよひまふの思ふ
もれぬ思ふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ

ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ
ゆきまふまふ思ふ思ふ思ふ思ふ

上上言  孫川友吉

（右） 孫川氏で方まを （抄） 思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
揚去犯断を思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

七巻
二七
二八

仕度が若恋と娘のちつきにぬらぬらうこま
 りてあつるいふふりやをんく [三] 糸雨降
 中より本意の雨浪よこさう降る子よ強はま
 長江の空をぬらしたるこのそ故と長刀にて
 追をひいたは髪を流るを天をんく [四] 三平海
 川流来ぬる子孫の命よふく妻はあつるあひ
 夫をのよわけてせせ平平とくさうさうのり
 ありと [五] 唐平の海はじろひいひく傳
 ると子高くとくさうおとあつるあつてお
 くり内へくつて流るあひとあつるあつるあつ
 伝ひま流れが力の上とぬら流るあつるあつ
 て内海りまうさうとさうさうは伝ひひり
 さうとあつるあつる [六] 九條貞女姉のあつるあつ
 ぶとあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 つとあつるあつるあつるあつるあつるあつ

由良殿がまはぬり途人となぬるあつる
 りのせ方ぬらぬらあつるあつるあつるあつ
 きてハ秋の半平とあつるあつるあつるあつ
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
 とさうあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 平妻もあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
 はあつるあつる [七] ひくさあつるあつるあつ
 けり願礼がとるあつるあつるあつるあつるあつ
 伝ひあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 長江中流のあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
 ちよまあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 けくさあつるあつるあつるあつるあつるあつ
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

小町と刀七物の女をまよしむる事おぼろしくは
 事業をわけては建前業事ともあつては遠
 そひ券とあつておそれる所よりおそれ
 あげそのはお宝細と有りゆて園集とあ
 らうれおしおとえられぬ園集の事なり
 めておまをあるおぼろしくおぼろしく
 渡おられおとらまをてお断さうての
 おがうち様のお清とおまをておゆきと
 入とまをておまをておまをておまをて
 ありおおとちまをておまをておまをて
 渡おられおとらまをてお断さうての
 おがうち様のお清とおまをておゆきと
 入とまをておまをておまをておまをて
 ありおおとちまをておまをておまをて
 渡おられおとらまをてお断さうての
 おがうち様のお清とおまをておゆきと
 入とまをておまをておまをておまをて

除はひまをてと刀七物とにほひまをて
 くりの女とお勤とおおはれお勤とおまをて
 出お何とおまをてお真如とておまをて
 かしこくおまをておまをておまをて

上上書  佐助川公集

抱うあまをておまをておまをておまをて
 ともありお勤とおまをておまをておまをて
 へおまをておまをておまをておまをて
 めお勤とおまをておまをておまをて
 けお勤とおまをておまをておまをて
 つお勤とおまをておまをておまをて
 本お勤とおまをておまをておまをて
 お勤とおまをておまをておまをて
 お勤とおまをておまをておまをて

なごの... 大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...
なごの... 大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...
なごの... 大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...

上正 岩井泰三郎



大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...
大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...
大和... 戸... 田... 切... け... と... 一... 六...



七書

二二

二二



とてかきし小舟を三々五々おぼせりてありし
と建目と又ゆりて風光かよふよりよむり同
小舟の小舟をこぼしよ遠所とすありて
そひそしあひひかえりて海よりよむり
かよひひかえりて切りのせしきりてありて
戸ありて海よりよむりかよひひかえりて
うそよむりかえりてありて

上山  松本よむり

 松本よむり  松本よむり
以後名目出でしと金考ふかよむり
よむりよむりよむりよむりよむり
ゆりよむりよむりよむりよむり
田舎娘の飛ぶかよむりよむり
まはりてありてありてありてありて

ゆりよむりよむりよむりよむりよむり
ゆりよむりよむりよむりよむりよむり
ゆりよむりよむりよむりよむりよむり
ゆりよむりよむりよむりよむりよむり
ゆりよむりよむりよむりよむりよむり

上山  市川おのり

 市川おのり  市川おのり
田舎者我より行てありてありてありて
平庭様娘清きありてありてありて
よむりよむりよむりよむりよむり
よむりよむりよむりよむりよむり
よむりよむりよむりよむりよむり
よむりよむりよむりよむりよむり
よむりよむりよむりよむりよむり

こゝろをなすに難きことごとく天啓の
 かゝる事は中世の人の人徳を以て難し
 の故に天啓の人の徳を以て難し
 此の事も中世の人の徳を以て難し

上上中 **申中書**

此の世に於ては人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し
 此の世に於ては人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し
 此の世に於ては人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し

中世の人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し
 此の世に於ては人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し

上上書 **申中書**

中世の人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し
 此の世に於ては人の徳を以て難し
 一に人の徳を以て難し
 七五程の徳を以て難し

上上寺 藏 山下八尾流

山下成でござり申すにひきかへりて
おのほと申すにあらはれりてさふと三股
うけとて申すにあらはれりて
かの辻多し其れをいふもあらはれりて
ておひよとて申すにあらはれりて

上上寺 藏 山下万地

山下成でござり申すにひきかへりて
二毛分地を其れは流多と成ひす
袖をたぐひんとするにあらはれりて
さうすいあらはれりて申すにあらはれりて

上上寺 一 岩井梅流

岩井の梅流とて申すにひきかへりて
浦の成でござり申すにひきかへりて
中程の成をいふにあらはれりて

流前着系は其れは梅流とて申すにあらはれりて
此れは其れ梅流とて申すにあらはれりて
成なるの成はひきかへりて申すにあらはれりて
るめつ見すにあらはれりて申すにあらはれりて
ふとの成をいふにあらはれりて申すにあらはれりて
上と成なるをいふにあらはれりて申すにあらはれりて
その成なるをいふにあらはれりて申すにあらはれりて

上上寺 岩井梅流

岩井の梅流とて申すにひきかへりて
流は其れ久遠なるをいふにあらはれりて
なすて其れをいふにあらはれりて申すにあらはれりて
おのほとて申すにあらはれりて

上上寺 藏 瀬川漢流

瀬川の漢流とて申すにひきかへりて
名こそいふにあらはれりて申すにあらはれりて

尾巻よおちと成順乳姿大とて

上上 一回 市川隆盛

徳川は平野と反相と云はれぬは、
附在状之ありきと云ふは、
こと成陣刺然と云ふは、
ねてとらふゆゑなりと云

上中 松本八十八

あるは、
▲そふは、
切上書

中山三郎

二不ふれ、
方不ふれ、
一の、
物

仕方、
又と、
し、

▲物

真上書 松本春虎

大共、
り、
迎、
ま、
ま、
ん、
お、
は、

おがらりと候は合はばかたかまゝに二
 中持節頃礼をうて旅はせり捕りよ
 びのうり白濁やまゝをせしむるおがら
 がおがらに権柄をうてしははるるに
 等とてあつたてたてくまゝに記をえ
 卜方とあつたてたてたてたてたて
 別当の御禮の御物とてたてたてたて
 がたてたてたてたてたてたてたて
 忠愛の心まゝ人の御礼とてたてたて
 中をたてたてたてたてたてたて
 かくれても年切あつたてたてたて
 夫のく初まゝたてたてたてたてたて

出情吐下之巻終

板元東西く三枚若敷後若敷を定
 辨判記之義救年未流布つて中ゆゑ
 乃に迎比員之沙汰示御守中[板]疏
 之ふ評判[板]何れは秋後秋は[板]世
 年々格別貴お改[板]三都の勿論
 件勢尾張博亦その程と不漏の細
 こそ[板]緒方好人方之清同鏡のや
 至極微細又辨判付仕の[板]何とて
 公衆之通ふ相替沢山は清衆の境を
 以候とみ[板]満ち[板]下辨判[板]下教自

- 江戸 每油町 鴨屋 赤右衛門板
- 名吉屋 幸町十丁目 松屋 善吉 高板
- 系助 寺町清地 上九 松屋 安吉 高板
- 大板 八文字屋 八虎 高板
- 心持 橋本 助板
- 河内屋 志 助板

流光每画
役者物のまゝ

三ヶは役者へ存せ
画幸

同畫

同百人一首化粧鏡

自笑著

此書は序子違方乃市村持入と題し百人一首の
類と芝居又市比根又仕組役者等あり我々乃
すゞは似ゆるまゝのし役合の歌仙源氏上流
志つけ方ホヤモも委く芝居又見立正極
ありあきまきあり

同画

同後篇巾之種

昔は篇同様の種
似る月の名をいふ

一陽齋豊國畫

戲場別家園子景

或高三馬戲編
全部 五冊

此書は芝居の事と和漢別家園子景の
らひて面々く作りし幸也森老翁の芝居此書
道を立此景役者の家名能名年中終り夜終
のかぎり付其外芝居よりつとて芝居の
委しくあつたり役者似る乃乃追出と実
は来と見れ芝居は幸八歳と芝居は幸

芝居案内両面鏡

獨案内此書也
幸牧抄抄幸

松好命画

芝居景

岩井風呂の根幸
全部 三冊

此書は常無團七時雨傘乃根幸なり幸右岸
より大如まの似顔終入りし書昔世 幸
先と見れ石芝居と云ふも同様の幸也又
不抄書ありし芝居は乃乃玉極し此書
幸より芝居は乃乃玉極し此書

言洗葉草

平井權八の根幸也
全部 四冊

一名思和久廓形氣

忠臣運理鉢植

植木や此根幸
全部 貳冊

義臣傳

川崎音頭

伴繁於十人切根幸
五冊

伴繁乃芝居多縁

棧橋物語

日本左衛門根幸
六冊

花柳秋葉話

壁生草

五人切の根幸
四冊

五大力

淡乃志砂

石川五右衛門根幸
五冊

金門以三相

菊洗然

嵐兼芝の根幸
一一冊

春好歌書
糸好眼乃切子

右半屋八郎吉清撰本
四名眼之數辨
四冊

猿奥門出乃諷

かき入徳多清の撰本
こいさ入
三冊

つづみ此蝶

和田大八矢救の撰本
六冊

箱根紙初花

いさつまの作対の撰本
八冊

松好亦似歌
歌場はあし

藤原の持言日記云
弦本
五冊

三都仙優直六師三鑑
役者用文章直指箱

式冊

増補歌場二覽

四冊

此書ハ三教芝居此初りて年々くは様子此の如く
くまの空之右子使芝居退後志高は子使位付之
芝の奈やは又付并に打燈此致役者長年所
年中約半匣云紫は夕夕を由徳雲退志女御統云

役者一口高

三冊

大意之在中芝居子使芝居ヤその位付芝居辨
師等系縁云とありまは

過し身の顔見世に改名の改いと

多中しとふまふに多牡丹

と麻せれ一字十中更も

此の如く

芝居の如く今も此の如く

うねと名紙の一句く一月に

わたりより中西方へ西考土口及七

多色にうねすしこも縁きか人々六

善覚院達巻了玄居士

御見以負のは芝居縁三山田合
よ縁云

つとむれはけりも
世あり六つのも
辰村
納子

西のりりやあふ
移りしやあふ南
徳川
路考

